茨城県教育財団文化財調査報告第178集

常磐新線及び主要地方道野田牛久線新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

殿開遺跡

平成13年3月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第178集

常磐新線及び主要地方道野田牛久線新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

殿開遺跡（とのびらき）

平成18年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，長期的な展望のもとに，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県土の普遍的な発展を図るために，交通体系の整備を進めております。

つくばと首都圏を直結する常磐新線と，主要地方道野田牛久線の新設もその一環として計画されたもので，その予定地内には多くの埋蔵文化財が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，平成11年4月から6月まで守谷町殿開遺跡において発掘調査を実施しました。

本書は，平成11年度に調査を行った殿開遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理作業を進めるにあたり，委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し，深く感謝申し上げます。

また，茨城県教育委員会，守谷町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋藤佳郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成11年度に発掘調査を実施した茨城県北相馬郡守谷町大字大柏に所在する殿開(とのがい)遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　査　　平成11年4月1日～平成11年6月30日

整　理　　平成12年4月1日～平成12年6月30日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第二課長小泉光正の指揮のもと，調査第2班長横堀孝徳，主任調査員平石尚和，茂木悦男が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理課長川井正一の指揮のもと，主任調査員茂木悦男が担当した。

5　本書の作成にあたり，旧石器の種別及び特徴については財団法人千葉県文化財センター主席研究員の橋本勝雄氏に御指導を戴いた。また旧石器の実測については，大成エンジニアリング株式会社に委託した。

6　発掘調査及び整理に際し，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X軸＝－6,520m，Y軸＝＋12,960mの交点を基準点（A1a1）とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA,B,C…，西から東へ1,2,3…とし，その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。

さらに，小調査区も同様に北から南へa,b,c…j，西から東へ1,2,3…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠し，「A1a1区」，「B2b2区」のように呼称した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－SI　土坑－SK　溝－SD　道路跡－SF　P－柱穴

遺物　土器－P　石器・石製品－Q　金属製品－M　拓本土器－TP

土層　撹乱－K

3　遺構及び遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の掲載方法については以下のとおりである。

(1)　遺跡全体図は縮尺200分の1とし，各遺構の実測図は，60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は，原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺のスケールをつけて表示した。

6　「主軸方向」は，炉・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　N－10°－E）

7　遺物の計測値は，口径－A　器高－B　底径－C　高台（脚）径－D　高台（脚）高－E　つまみ径－F　つまみ高－Gとし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

8　遺物番号については，土器，拓本のみ掲載の土器片，石製品，金属製品ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に付した番号は同一とした。

9　遺物観察表の備考の欄は，土器の現存率及びその他必要と思われる事項を記した。

抄　　録

ふりがな	じょうばんしんせんおよびじゅうちほうどうのだうしくせんしんせつじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	常磐新線及び主要地方道野田牛久線新設事業地内埋蔵文化財調査報告書
副書名	殿開遺跡
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第178集
編著者名	茂木　悦男
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　ＴＥＬ　029-225-6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　ＴＥＬ　029-225-6587
発行年月日	2001年（平成13年）３月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
殿開遺跡 とのびらきいせき	茨城県北相馬郡守谷町大字大柏字八化原588番地の４ほか いばらきけんきたそうまぐんもりやまちおおあざおおかしわあざやけはら	08561 - 31	35度 56分 26秒	139度 58分 43秒	18～ 20m	19990401 ～ 19990630	1,916㎡	常磐新線及び主要地方道野田牛久線新設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
殿開遺跡	包蔵地	旧石器		サイドスクレイパー，ナイフ形石器 角錐状石器，剥片	旧石器時代から平安時代にかけての集落跡である。
	集落跡	縄文	炉穴跡　３基	縄文土器片，石棒，磨製石斧，磨石	
		平安	竪穴住居跡　４軒 土坑　２基	土師器（坏，高台付坏，高台付椀，甕，甑），石器（砥石） 鉄製品（刀子，鉸具）	
	その他	時期不明	竪穴状遺構　２基 溝　４条 道路跡　１条 ピット群　１か所 土坑　24基	土師質土器（皿），陶器片，磁器片 鉄製品（刀子，釘），不明鉄製品，不明銅製品，石器（砥石），古銭	

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
挿図目次，表目次，写真図版目次
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第3章　調査の成果 …… 9
　第1節　遺跡の概要 …… 9
　第2節　基本層序 …… 9
　第3節　遺構と遺物 …… 10
　　1　旧石器時代 …… 10
　　(1)　石器集中地点 …… 10
　　(2)　石器集中地点外出土遺物 …… 16
　　2　縄文時代 …… 18
　　(1)　炉穴 …… 18
　　3　平安時代 …… 20
　　(1)　竪穴住居跡 …… 20
　　(2)　土坑 …… 31
　　4　時期不明の遺構と遺物 …… 34
　　(1)　竪穴状遺構 …… 34
　　(2)　土坑 …… 37
　　(3)　溝 …… 39
　　(4)　道路跡 …… 44
　　(5)　ピット群 …… 45
　　5　遺構外出土遺物 …… 46
　第4節　まとめ …… 50
写真図版

挿図目次

第1図　殿開遺跡周辺遺跡分布図 ……4
第2図　殿開遺跡遺構全体図 ……7・8
第3図　基本土層図 ……9
第4図　第1号石器集中地点平面図 ……10
第5図　第1号石器集中地点遺物実測図 ……11
第6図　第2号石器集中地点平面図 ……13
第7図　第2号石器集中地点遺物実測図 ……13
第8図　第3号石器集中地点平面図 ……14
第9図　第3号石器集中地点遺物実測図 ……15
第10図　石器集中地点外遺物実測図 ……17
第11図　第1号炉穴実測図 ……18
第12図　第2号炉穴実測図 ……19
第13図　第3号炉穴実測図 ……20
第14図　第1号住居跡実測図 ……22
第15図　第1号住居跡出土遺物実測図 ……23
第16図　第2号住居跡実測図 ……26
第17図　第2号住居跡出土遺物実測図 ……27
第18図　第3号住居跡実測図 ……28
第19図　第3号住居跡出土遺物実測図 ……29
第20図　第4号住居跡実測図 ……30
第21図　第4号住居跡出土遺物実測図 ……31
第22図　第14号土坑・出土遺物実測図 ……32
第23図　第15号土坑・出土遺物実測図 ……33
第24図　第1号竪穴状遺構実測図(1) ……35
第25図　第1号竪穴状遺構・出土遺物実測図(2) ……36
第26図　第2号竪穴状遺構実測図 ……37
第27図　第10号土坑・出土遺物実測図 ……37
第28図　第13号土坑実測図 ……38
第29図　第20号土坑実測図 ……38
第30図　第30号土坑実測図 ……38
第31図　第31号土坑実測図 ……39
第32図　第2号溝・第1号道路跡実測図(1) ……41
第33図　第2号溝・第1号道路跡実測図(2) ……42
第34図　第1・3・4号溝実測図 ……43
第35図　第2～4号溝出土遺物実測図 ……43
第36図　第1号道路跡出土遺物実測図 ……44
第37図　遺構外出土遺物実測図(1) ……46
第38図　遺構外出土遺物実測図(2) ……47

表目次

表1　殿開遺跡周辺遺跡一覧表 ……5
表2　第1号石器集中地点出土剥片一覧表 ……12
表3　第2号石器集中地点出土剥片一覧表 ……14
表4　第3号石器集中地点出土剥片一覧表 ……16
表5　第1号ピット群計測表 ……45
表6　殿開遺跡住居跡一覧表 ……48
表7　殿開遺跡土坑一覧表 ……48
表8　殿開遺跡溝一覧表 ……49
表9　石器集中地点及び石器集中地点外石器等組成表 ……50

写真図版目次

ＰＬ１　殿開遺跡遠景，殿開遺跡全景

ＰＬ２　第１号炉穴，第２号炉穴，第３号炉穴，第１・２・４号住居跡，第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡竈，第１号住居跡竈遺物出土状況，第２号住居跡竈

ＰＬ３　第２号住居跡竈遺物出土状況，第２号住居跡遺物出土状況，第４号住居跡遺物出土状況，第４号住居跡貯蔵穴遺物出土状況，第３号住居跡遺物出土状況，第３号住居跡竈遺物出土状況，第14号土坑，第15号土坑遺物出土状況

ＰＬ４　第１号竪穴状遺構（北から），第１号竪穴状遺構（西から），第１号竪穴状遺構遺物出土状況，第２号竪穴状遺構，第１号溝，第３・４号溝遺物出土状況，第２号溝・第１号道路跡（北から），第２号溝・第１号道路跡（南から）

ＰＬ５　第１号石器集中地点・石器集中地点外出土遺物

ＰＬ６　第１・２・４号住居跡出土遺物

ＰＬ７　第１・４号住居跡，第10・14・15号土坑出土遺物

ＰＬ８　第１・２号住居跡，第２～４号溝，第１号道路跡，第１号竪穴状遺構，遺構外出土遺物

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

茨城県は，北相馬郡守谷町大柏地区において常磐新線と，主要地方道野田牛久線の建設を進めている。

平成8年12月3日に茨城県県南都市建設事務所から茨城県教育委員会に，常磐新線及び主要地方道野田牛久線（北相馬郡守谷町大柏地区～筑波郡谷和原村東楢戸地内）地区内の埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会があった。

そこで，平成10年9月4日，茨城県教育委員会は，守谷町大字大柏地区の試掘調査を実施した。その結果，茨城県教育委員会は，茨城県県南都市建設事務所に，常磐新線及び主要地方道野田牛久線地区内に殿開遺跡が所在する旨回答した。

平成10年12月1日，茨城県県南都市建設事務所から茨城県教育委員会に，殿開遺跡の取り扱いに関する協議があった。

平成11年3月15日，茨城県教育委員会は，茨城県県南都市建設事務所に，殿開遺跡の取り扱いについて記録保存とする旨回答し，調査機関として茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は，茨城県県南都市建設事務所と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成11年4月1日から同年6月30日にかけて殿開遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

殿開遺跡の発掘調査は，平成11年4月1日から平成11年6月30日までの3か月間実施した。以下，調査の経過について，その概要を月ごとに記述する。

4月前半　発掘調査のための諸準備をし，12日に現場事務所と現場倉庫を立ち上げた。続いて発掘器材を搬入した。12日は，グリッドによる試掘をした。

後半　16日から室内補助員及び調査補助員を雇用し，遺跡の東側からトレンチによる試掘を開始した。

21日から重機による表土除去を開始し，並行して遺構確認作業を行った。28日までに重機による表土除去を終了した。遺構確認作業により，竪穴住居跡5軒，溝3条，土坑20基余りを確認した。

5月前半　6日に遺構確認状況の写真撮影を行い，遺構確認状況図の作成をした。引き続き遺構調査を開始した。遺構調査は，住居跡，土坑，溝の順で始めた。第1・2号住居跡は重複しており，新旧関係を明らかにするよう慎重に掘り込みを進めた。

12日に第2号溝の上面に硬化面を検出し，道路跡の可能性が考えられた。硬化面の範囲を図面にとった。13日に遺跡南部の斜面部で，数軒が重複したとみられる遺構を検出し，掘り込みを進めたが，住居跡の可能性は低く，性格は不明の大型竪穴状遺構とした。

後半　17日から，住居跡と並行して，溝，土坑の調査を進めた。

25日に第1号住居跡の床面を精査したところ，中央部から粘土と焼土を検出した。これは竈材と考えられ，第1号住居跡と重複して，もう1軒の住居跡が構築されていたことが考えられ，これを第4号住居跡とした。第4号住居跡は，上層断面及び出土土器から判断して，時期差はあまりないものの，

第１号住居跡及び第２号住居跡よりも新しいと考えられた。これら３軒の住居跡は，いずれも平安時代（９～10世紀）のものと考えられた。

６月前半　３日までに溝及び道路跡の掘り込みが終了し，完掘写真撮影後，平面図の作成を開始した。

４日に西部，北部及び中央部から旧石器が出土したため，旧石器出土地点の調査を開始した。

10日に中央部からサイドスクレイパーとナイフ形石器が１点ずつ出土した。他にも頁岩の剥片が多数出土した。旧石器の出土状況から，石器製作跡の可能性が考えられた。

後半　16日にラジコンヘリによる航空写真撮影を行った。

17日に第26号及び第29号土坑の内部から焼土が検出され，また縄文土器片（縄文時代早期）が出土したことから，縄文時代の炉穴跡の可能性が高いと思われた。

23日までに，土坑，溝，道路跡を含めてすべての調査を終了した。遺跡の完掘状況の写真撮影をした。25日に遺物を，26日に発掘器材を搬出した。30日までに，安全対策と残務処理を終了し，すべての調査を終了した。

第2章 位 置 と 環 境

第1節 地 理 的 環 境

殿開遺跡は，北相馬郡守谷町大字大柏字八化原588番地の4ほかに所在する。

殿開遺跡が所在する守谷町は，北側は谷和原村及び小貝川をはさんで伊奈町と接し，東側は取手市と，西側は水海道市と，南側は利根川を境に千葉県野田市と柏市に接している。

守谷町の地形を概観すると，猿島・北相馬台地と利根川・鬼怒川・小貝川の河川にそって形成された沖積低地とから成っている。町域の大半を占める北相馬台地は，利根川と小貝川の間にあり，北西から南東方向に延びる標高20m前後の洪積台地である。

低地は，北東側は筑波・稲敷台地間に広がる小貝川低地，南西側は下総台地間に挟まれた利根川下流低地とに分けられ，いずれも肥沃な沖積土の耕地となっている。また，これらの沖積低地は，沖積世の湾入海岸線を示し，周辺には多くの貝塚が分布している。

殿開遺跡は，守谷町の中央部からやや南側に位置し，守谷町役場から南へ約0.9kmの大柏地区に所在する。

当遺跡は，沖積低地から樹枝状に入り込む小支谷に面した標高18～20m前後の舌状台地の斜面部にある。現況は畑地である。

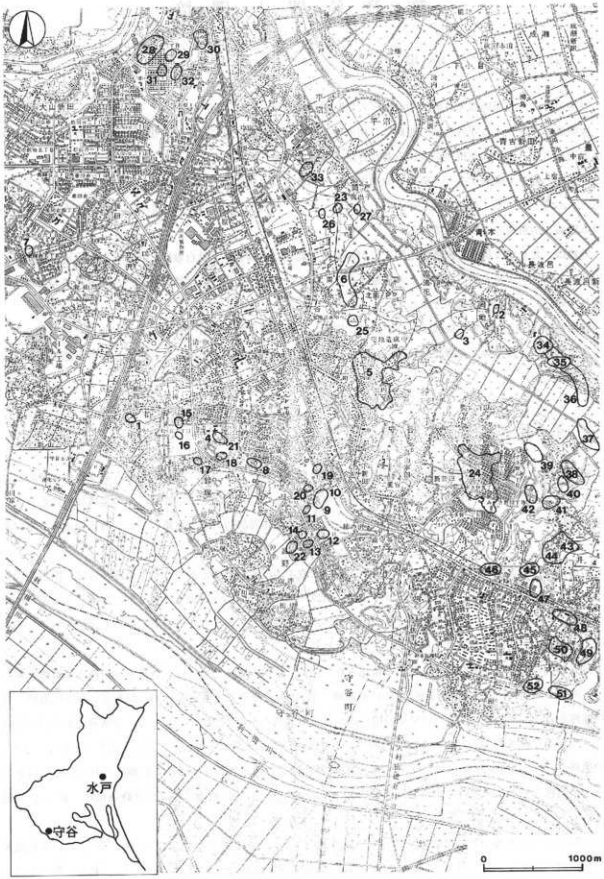
第2節 歴 史 的 環 境

殿開遺跡が立地する北相馬台地の周辺には，肥沃な低地が広がっている。この低地は，縄文時代の初めには古鬼怒湾とよばれる入り海で，周辺には多くの貝塚が分布している。このことから，この地域は古代から人々の生活に適した場所であったことがわかる。ここでは，殿開遺跡周辺の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては，当教育財団が調査した取手市の柏原遺跡(かしわばら)がある。柏原遺跡からは，旧石器の集中地点が5か所検出され，頁岩製の彫器，掻器，削器や細石刃のほか，瑪瑙，チャート，黒曜石などの剥片が多数出土した。これは，石器製作跡と考えられている。[1] 当遺跡から出土した頁岩製の旧石器は，石材などの点で柏原遺跡の旧石器と共通する点が多いように思われる。

縄文時代の遺跡は，早期から晩期まで確認されている。早期の遺跡としては，谷和原村の西下宿遺跡(にしした じゅく)〈30〉，守谷町の今城遺跡(いまじょう)〈22〉，沼崎遺跡(ぬまさき)〈23〉，原遺跡(はら)〈27〉，取手市の堂ノ脇遺跡(どうのわき)〈50〉がある。西下宿遺跡，今城遺跡からは，主として縄文時代早期の田戸式から茅山式期の土器片が出土している。今城遺跡からは，尖底土器の底部片が多数出土している。[2] 沼崎遺跡，原遺跡からは，早期から前期の土器片が出土している。また，原遺跡からは，早期のものと考えられる炉穴跡15基と縄文時代前期の住居跡が1軒検出されている。[3] ほかに前期の遺跡としては，守谷町の鈴塚(すずづか)C遺跡〈18〉，郷州原遺跡(ごうしゅうはら)〈24〉，取手市の上高井嫌塚遺跡(かみたかいぬかづか)〈47〉，白籏遺跡(しらはた)〈51〉が知られている。

中期になると遺跡の数は増加し，守谷町の同地貝塚(どうち)〈3〉，谷和原村の大谷津(おおやつ)A遺跡〈28〉，大谷津B遺跡〈29〉，筒戸(つつど)A遺跡〈31〉，筒戸B遺跡〈32〉がある。大谷津A遺跡は，中期の阿玉台～加曽利E式期の集落跡である。[4] 大谷津B遺跡は，加曽利EⅢ～Ⅳ式期の集落跡である。[5] また，大谷津B遺跡の南側に隣接する筒戸A



第1図　殿開遺跡周辺遺跡分布図

表1　殿開遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世以降
①	殿開遺跡	○				○		
2	同地古墳群				○			
3	同地貝塚		○					
4	五十塚古墳				○			
5	守谷城跡						○	
6	庚塚遺跡				○			
7	大木遺跡		○					
8	高野A(大日)遺跡				○			
9	高野B遺跡				○			
10	高野C遺跡				○			
11	高野D遺跡				○			
12	高野E(乙子)遺跡				○			
13	高野F(北今城)遺跡				○			
14	高野G(北今城)遺跡				○			
15	高野H遺跡				○			
16	鈴塚A(座庄内)遺跡				○			
17	鈴塚B遺跡				○			
18	鈴塚C遺跡		○		○			
19	甲A(篠根入)遺跡				○			
20	甲B(仲原)遺跡				○			
21	鈴塚古墳群				○			
22	今城遺跡		○		○	○		
23	沼崎遺跡		○					
24	郷州原遺跡		○		○			
25	法花坊遺跡			○	○			○
26	永泉寺東遺跡		○		○		○	○

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世以降
27	原遺跡		○		○			
28	大谷津A遺跡		○		○	○		
29	大谷津B遺跡		○					
30	西下宿遺跡		○	○				
31	筒戸A遺跡		○			○		
32	筒戸B遺跡		○			○		
33	筒戸城跡						○	
34	奥山道台遺跡				○	○		
35	姫宮神社遺跡		○					
36	市之代古墳群				○			
37	上川辺遺跡		○					
38	上高井貝塚		○					
39	台坪遺跡		○					
40	向山Ⅱ遺跡					○		
41	貝塚新田遺跡					○		
42	山王作遺跡		○					
43	神明貝塚		○					
44	神明遺跡		○					
45	前新田遺跡		○					
46	大境遺跡		○					
47	上高井籠塚遺跡				○			
48	出土遺跡				○	○		
49	東山遺跡		○					
50	堂ノ脇遺跡					○		
51	白旗遺跡		○					
52	新屋敷遺跡					○		

遺跡，筒戸B遺跡もほぼ同時期の集落跡である。これらの4遺跡は，いずれも谷津に沿った台地上の平坦部に所在している。

後期の遺跡としては，守谷町の高野A（大日）遺跡〈8〉，取手市の姫宮神社遺跡〈35〉，台坪遺跡〈39〉，山王作遺跡〈42〉，神明遺跡〈44〉，前新田遺跡〈45〉，大境遺跡〈46〉，東山遺跡〈49〉がある。

晩期の遺跡としては，神明遺跡，同地貝塚がある。これらは，後期の大規模集落が継続したものであるが，この時期には遺跡数が急減する。

弥生時代の遺跡は少なく，高野A（大日）遺跡，守谷町の法花坊遺跡〈25〉が知られている。

古墳時代の遺跡としては，守谷町の同地古墳群〈2〉，庚塚遺跡〈6〉，原遺跡，取手市の市之代古墳群〈36〉から古墳が，守谷町の高野E（乙子）遺跡〈12〉，法花坊遺跡，高野F・G（北今城）遺跡〈13・14〉，高野A（大日）遺跡，甲B（仲原）遺跡〈20〉，今城遺跡，郷州原遺跡から集落跡が検出されている。法花坊遺跡では，4軒の和泉期の竪穴住居跡が確認されている。[6] 郷州原遺跡では，前期の住居跡が9軒，後期の住居跡が22軒検出されている。[7]

奈良・平安時代の遺跡は，守谷町の今城遺跡，郷州原遺跡，谷和原村の大谷津A遺跡，筒戸A・B遺跡，取手市の向山II遺跡〈40〉，貝塚新田遺跡〈41〉，堂の脇遺跡，新屋敷遺跡〈52〉，出上遺跡〈48〉，奥山道台遺跡〈34〉がある。今城遺跡の住居跡からは，奈良三彩の壺蓋の破片，緑釉陶器の浄瓶が出土しているが，検出された竪穴住居跡の数は少なく，遺物も少量出土している程度である。

中・近世の遺跡は，守谷町の守谷城跡〈5〉，法花坊遺跡，谷和原村の筒戸城跡〈33〉が確認されている。

※　本文中の〈　〉内の番号は，第2図及び表1周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

(1)　茨城県教育財団　「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　東原遺跡　前原遺跡　柏原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第143集』1999年3月

(2)　茨城県教育財団　「南守谷地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　乙子遺跡　北今城遺跡　大日遺跡　座庄内遺跡　篠根入・仲原遺跡　鈴塚B・C遺跡　鈴塚古墳群　今城遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅷ』1981年3月

(3)　茨城県教育財団　「常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書1　原遺跡　沼崎遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第112集』1996年3月

(4)　茨城県教育財団　「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3　大谷津A遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第28集』1985年3月

(5)　茨城県教育財団　「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1　大谷津B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第18集』1983年3月

(6)　守谷東遺跡発掘調査会　『城内遺跡・法花坊遺跡』1991年6月

(7)　郷州原遺跡発掘調査会　『郷州原遺跡』1981年11月

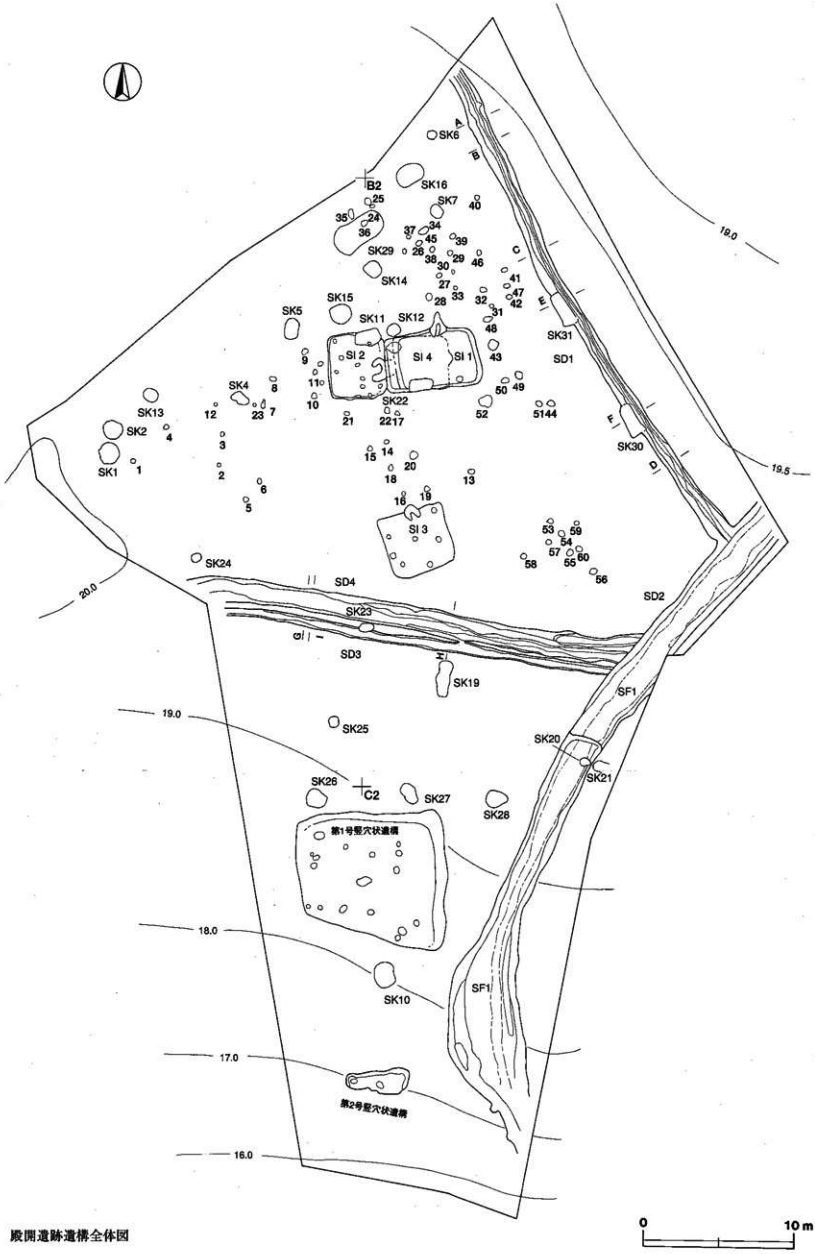
参考文献

・　蜂須紀夫『茨城県　地学のガイド』1986年11月

・　茨城県教育庁文化課　『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会1990年3月

・　守谷町教育委員会　『守谷町史』1985年3月

・　取手市教育委員会　『取手市史原始古代（考古）資料編』1989年3月



第2図　殿開遺跡遺構全体図

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

殿開遺跡は，守谷町のほぼ中央部，北相馬台地の西部に入り込む小支谷に面した標高18～20mの台地の縁辺部に位置する。調査面積は1,916㎡で，現況は畑地であった。

今回の調査で，旧石器の石器製作跡２か所，縄文時代の炉穴跡３基，平安時代の竪穴住居跡４軒，土坑２基，時期不明の竪穴状遺構２基，溝４条，道路跡１条が検出されている。

以上のことから，当遺跡は旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に７箱出土した。遺物の大部分は，奈良・平安時代の土師器で，住居跡から出土している。また，頁岩製のサイドスクレイパーやナイフ形石器，剥片も多数出土している。

第2節　基本層序

調査区北西部のＢ１b9区にテストピットを設定し，２ｍまで掘り下げて，基本層序の観察を行った（第３図）。

第１層は，30～40cmの厚さの耕作土層で，黒褐色をしている。

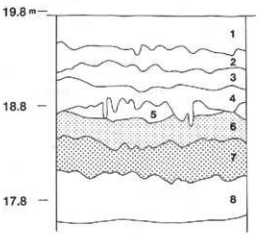
第２層は，15～30cmの厚さで，暗褐色をしたソフトローム層である。

第３層は，10～25cmの厚さで，暗褐色をしたソフトローム層である。色調は第２層より明るく，締まりがある。

第４層は，15～35cmの厚さで，褐色をしたソフトローム層である。第２・３層より締まりがある。

第５層は，最大20cmの厚さの褐色のハードローム層である。場所によっては，検出されない部分もあった。第５層はＡＴを含む層である。粘性・締まりとも強い。

第６層は，15～30cmの厚さで，暗褐色をしている。武蔵野台地等でいう第２黒色帯の上部に相当すると考えられる。粘性・締まりとも強い。



第３図　基本土層図

第７層は，25～50cmの厚さで，黒褐色をしている。武蔵野台地等でいう第２黒色帯の下部に相当すると考えられる。粘性・締まりとも強い。

第８層は，40～55cmの厚さで，褐色をしたハードローム層である。

遺構は，第２層上面で確認し，第３層及び第４層を掘り込んで構築されている。

第3節　遺構と遺物

1　旧石器時代

遺構調査の際，中央部及び北部から石器の剥片が出土した。そこで，文化層の有無を確認するため，石器が出土している地点を中心としてローム層の掘り下げを行った。その結果，石器集中地点３か所が確認された。石器は，台地の平坦部で標高19.0～19.4mの範囲から出土した。石器は可能なものについては極力図示し，観察表も載せたが，ごく小さい剥片については一覧表で記載した。

（1）石器集中地点

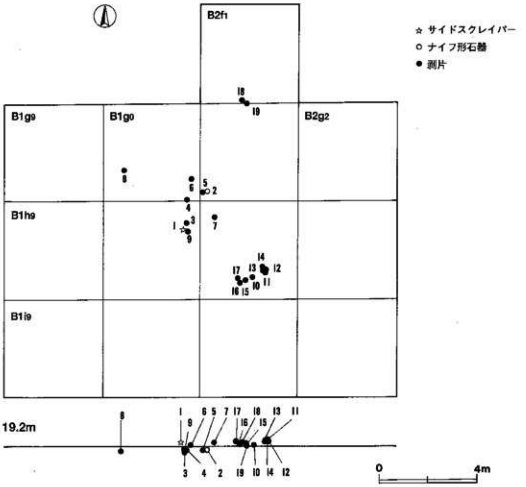
第１号石器集中地点（第４図）

位置　調査区域の中央部，Ｂ２f1・Ｂ１g0・Ｂ１g1・Ｂ１h0・Ｂ２h1区。

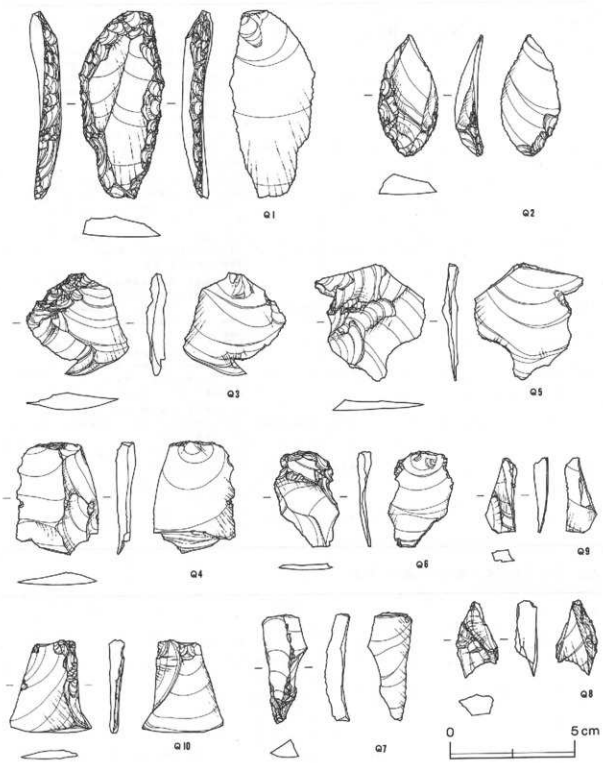
出土状況　南北12m，東西８mの範囲内に存在する。遺物は，標高19.01～19.39mの範囲内から出土した。これは当遺跡の基本土層（第３図）のほぼ第２層から第３層に相当し，ＡＴが検出された第５層の上部になる。

遺物　サイドスクレイパー１点，ナイフ形石器１点，剥片17点が出土している。石材は，いずれも硬質頁岩である。

所見　出土石器の材質は硬質頁岩であり，他地域から持ち込まれた可能性が高い。また，石器の出土層位は基本土層で，第２層及び第３層になる。剥片が多数出土しており，石器製作跡の可能性が考えられる。



第４図　第１号石器集中地点平面図



第５図　第１号石器集中地点遺物実測図

第１号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石材	出土地点		測線と調整の特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		出土地区	標高(m)		
第５図 Q1	サイドスクレイパー	7.5	3.4	1.1	25.0	硬質頁岩	B1b0	19.311	厚手の縦長剥片を素材にし、背面側の両側縁に厚い加工が施され、打面部と先端部を除いて全周にわたって刃部が施されている。打面部付近にはとりわけ角度の高い調整が加えられている。	中央部　PL5

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	剥離と調整の特徴	備考
第5図 Q2	ナイフ形石器	4.9	2.4	1.0	8.9	硬質頁岩	B 2 g1	19.136	極めて良質の硬質頁岩を用い，偏位の縦長剥片を素材にして，打面部側と先端部側にやや両方なニ次加工を施し，平面形態が涙滴形を呈するナイフ形石器に加工している。先端部にも微細な加工が認められる。裏面の右側縁部には平坦な二次加工が施されている。	中央部 PL5
Q 3	剥片	4.1	4.1	0.7	8.3	硬質頁岩	B 1 h0	19.017	寸詰まりの縦長剥片である。打面は平坦で，背面は主要剥離面と同方向の剥離が認められる。末端部は階段状を呈している。	中央部 PL5
Q 4	剥片	4.5	3.3	0.8	8.8	硬質頁岩	B 1 h0	19.166	縦長剥片もしくは右刃の上半部。背面には主要剥離面と異方向の剥離が認められる。打面は細かく調整されている。裏面側からの力により破損している。	中央部 PL5
Q 5	剥片	4.7	4.4	0.6	7.2	硬質頁岩	B 2 g1	19.177	不定形な剥片の下半部。背面に主要剥離面側とは異なる左右両側縁側からの剥離が認められる。背面側からの力により破損している。	中央部 PL5
Q 6	剥片	3.8	2.6	0.4	3.0	硬質頁岩	B 1 g0	19.250	薄手の縦長剥片，打面部は調整打面で，背面幅には主要剥離面とは異なる方向の剥離面が認められる。先細りした形態を示し，主要剥離面側へ湾曲している。先端部は背面側からの力により破損している。	中央部 PL5
Q 7	剥片	4.3	1.8	0.8	4.2	硬質頁岩	B 2 h1	19.367	扁平な剥片の下半部。断面形態は三角形を呈する。中央の稜線から右側縁側への調整が顕著である。主要剥離面に向かって湾曲している。主要剥離面側からの力により破損している。	中央部 PL5
Q 8	剥片	3.0	1.7	0.9	3.0	硬質頁岩	B 1 g0	19.041	剥片の打面部側と先端部側が折損している厚手の剥片の中央部である。背面は平坦剥離面と反対方向の剥離も認められる。	中央部 PL5
Q 9	剥片	3.0	1.2	0.6	1.3	硬質頁岩	B 1 h0	19.121	幅広の縦長剥片の中央部で，左右両側が破損している。折れ面は階段状を呈している。	中央部 PL5
Q10	剥片	3.7	3.3	0.5	4.6	硬質頁岩	B 2 h1	19.227	厚手で寸詰まりの縦長剥片。平面形態は末広がりを呈している。背面には右側縁に右方向からの先行剥離が認められる。末端部は階段状を呈している。	中央部 PL5

表2　第1号石器集中地点出土剥片一覧表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	剥離と調整の特徴	備考
Q11	剥片	1.5	1.0	0.3	0.2	黒曜石	B 2 h1	19.352	薄手の縦長剥片	中央部
Q12	剥片	1.8	1.6	0.4	0.7	〃	B 2 h1	19.342	縦長剥片，表面に自然面を残している	〃
Q13	剥片	2.4	1.5	0.6	1.6	〃	B 2 h1	19.377		〃
Q14	剥片	1.1	1.1	0.5	0.5	〃	B 2 h1	19.325		〃
Q15	剥片	0.9	0.8	0.1	0.1	〃	B 2 h1	19.382	薄手の不定型の剥片	〃
Q16	剥片	1.1	1.8	0.25	0.4	〃	B 2 h1	19.365	縦長剥片	〃
Q17	剥片	1.8	0.85	0.35	0.5	〃	B 2 h1	19.372	縦長剥片，背面に自然面を残している	〃
Q18	剥片	2.25	2.15	0.75	1.8	〃	B 2 f1	19.394	寸詰まりの縦長剥片	〃
Q19	剥片	1.45	2.1	0.45	1.0	〃	B 2 f1	19.333	寸詰まりの縦長剥片	〃

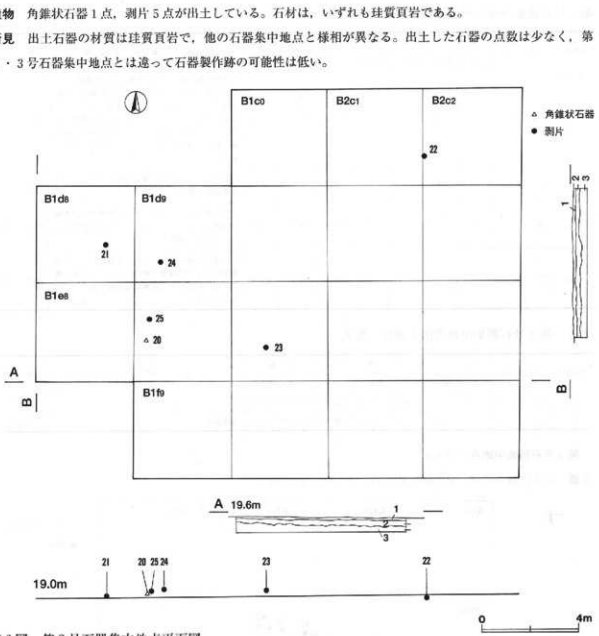
第2号石器集中地点（第6図）

位置　調査区域の中央部，B 2 c2・B 1 d8・B 1 d9・B 1 e9・B 1 e0。

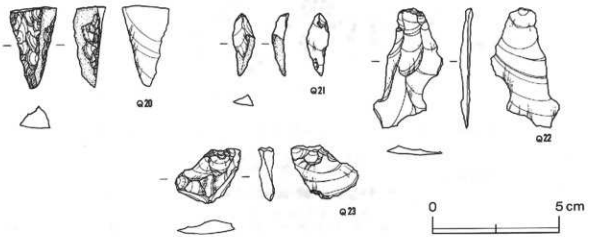
出土状況　南北12m，東西15mの範囲内に存在する。第6図の土層は，当遺跡基本土層（第3図）に相当し，遺物は，標高18.96～19.34mの範囲内から出土した。これは当遺跡の基本土層第2～4層に相当し，ATが検出された第5層の上部になる。

遺物　角錐状石器１点，剥片５点が出土している。石材は，いずれも珪質頁岩である。

所見　出土石器の材質は珪質頁岩で，他の石器集中地点と様相が異なる。出土した石器の点数は少なく，第１・３号石器集中地点とは違って石器製作跡の可能性は低い。



第６図　第２号石器集中地点平面図



第７図　第２号石器集中地点遺物実測図

第２号石器集中地点出土遺物観察表

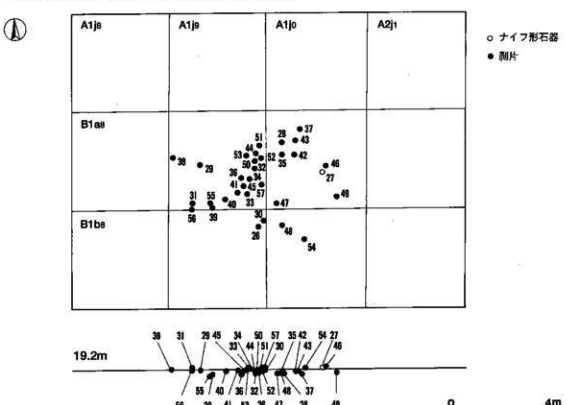
図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	調整と調整の特徴	備考	
第７図 Q20	角錐状石器	3.2	1.8	1.1	3.8	珪質頁岩	B１e9	19.132	角錐状石器の基部。厚手の縦長剥片を素材にし，打面部側と末端部側に角度が異く剥離状の調整を加えている。後上からも左側縁に向かって二次加工が施されている。背面の中央の稜線の右側には，自然面を残している。裏段状を呈する後上からの調整によって折損したものと考えられる。	西部	PL5
Q21	剥片	2.5	0.9	0.3	0.7	珪質頁岩	B１d8	19.045	小形の剥片で，背面に稜面を残している。主要剥離面側へ彎曲している。	西部	PL5
Q22	剥片	4.7	2.7	0.3	2.5	珪質頁岩	B２c2	18.967	厚手の縦長剥片。背面には主要剥離面と同方向の剥離が認められる。末広がりの平面形態を示し，末端部は破損している。	西部	PL5
Q23	剥片	2.1	2.6	0.5	1.9	珪質頁岩	B１e0	19.201	寸詰まりの縦長剥片。打面は比較的広く，平面形態はやや左側縁側に彎曲している。主要剥離面に見られる小さな剥離面は長真であり，二次加工ではない。	西部	PL5

表３　第２号石器集中地点出土剥片一覧表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	調整と調整の特徴	備考
Q24	剥片	2.35	1.3	0.4	1.0	珪質頁岩	B１d9	19.346		西部
Q25	剥片	1.3	1.05	0.4	0.4	珪質頁岩	B１e9	19.211	調整剥片	西部

第３号石器集中地点（第８図）

位置　調査区域の北部，Ｂ１a9・Ｂ１a0・Ｂ１b9・Ｂ１b0

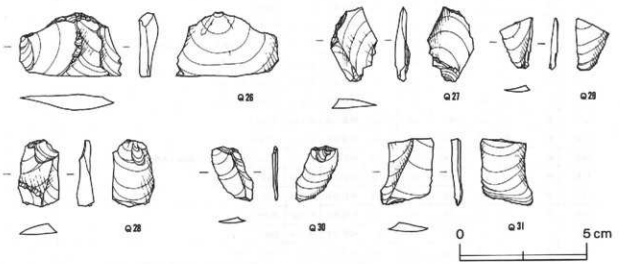


第８図　第３号石器集中地点平面図

出土状況　南北8m，東西8mの範囲内に存在する。遺物は，標高18.91～19.30mの範囲内から出土した。これは当遺跡の基本土層（第３図）の第２～４層に相当し，ＡＴが検出された第５層の上部になる。

遺物　ナイフ形石器１点，剥片31点が出土している。石材は，硬質頁岩，黒曜石である。

所見　出土石器の材質は硬質頁岩及び黒曜石であり，他地域から持ち込まれたものと考えられる。また，出土層位は，基本土層で第２～３層になる。剥片が多数出土しており，石器製作跡の可能性が考えられる。



第９図　第３号石器集中地点遺物実測図

第３号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点		剥離と調整の特徴	備考	
							基本土層	標高(m)			
第９図 Q26	剥片	2.5	4.0	0.7	5.8	硬質頁岩	B１b0	19.087	縦長剥片の上半部。打面部は作業面側から入念に調整されており，山形を呈している。中央で背面側からの力により破損している。	北部	PL5
Q27	ナイフ形石器	2.9	1.8	0.5	2.2	硬質頁岩	B２a1	19.263	薄手の石刃を素材にし，末端部を截断するように刃潰し剥離を施している。刃潰し剥離は左側縁寄りの大部分は裏面から施しているが，右側縁に接した約5mmの部分は裏面から施されている。右側縁の裏面側には微細な剥離が連続して認められる。	北部	PL5
Q28	剥片	2.6	1.6	0.8	2.4	硬質頁岩	B２a1	19.073	縦長剥片の上半部。打面は点状で，背面には主要剥離面とは異なる方向の剥離が認められる。背面側からの力により破損している。	北部	PL5
Q29	剥片	2.0	1.3	0.2	0.5	硬質頁岩	B１b0	19.052	薄手の剥片の末端部。階段状を呈している。末端部の右側縁に微細な剥離が認められる。	北部	PL5
Q30	剥片	2.1	1.6	0.2	0.5	硬質頁岩	B１b0	19.233	薄手の縦長剥片。打面部を欠損している。背面には，主要剥離面と同方向の剥離が認められる。主要剥離面側にやや彎曲している。	北部	PL5
Q31	剥片	2.6	2.1	0.4	1.8	硬質頁岩	B１a0	19.270	縦長剥片の下半部。末広がりになった末端部は階段状を呈している。背面側からの力により破損している。	北部	PL5

表4　第3号石器集中地点出土剥片一覧表

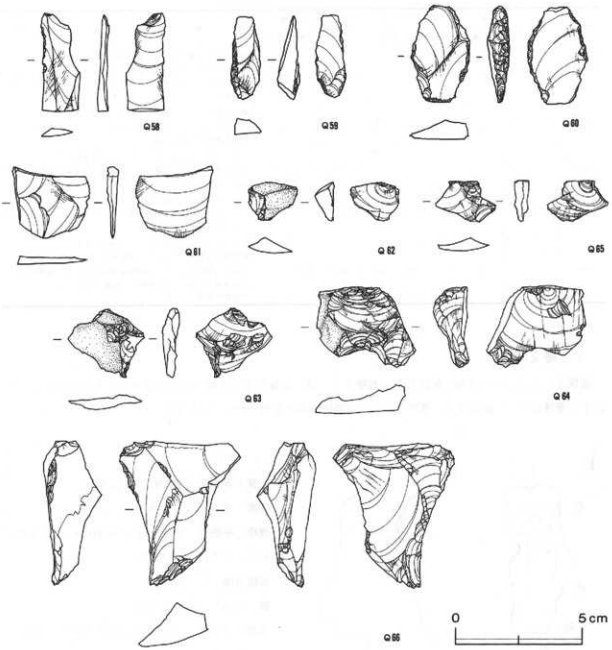
図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	剥離と調整の特徴	備考
Q32	剥片	0.5	0.1	0.1	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.168	剥片	北部
Q33	剥片	0.75	1.25	0.1	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.273		〃
Q34	剥片	0.7	1.2	0.2	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.250	寸詰まりの縦長剥片	〃
Q35	剥片	1.2	1.0	0.15	0.2	硬質頁岩	B 2 a0	19.148		〃
Q36	剥片	0.8	0.8	0.2	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.043		〃
Q37	剥片	1.75	1.9	0.5	1.5	硬質頁岩	B 2 a1	19.045	縦長剥片，打面部は調整されている	〃
Q38	剥片	2.3	1.5	0.3	1.0	硬質頁岩	B 1 a0	19.204	縦長剥片	〃
Q39	剥片	1.05	0.9	0.2	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.043	縦長剥片	〃
Q40	剥片	0.95	0.4	0.3	0.2	硬質頁岩	B 1 a0	19.098	縦長剥片	〃
Q41	剥片	1.0	0.7	0.2	0.2	硬質頁岩	B 1 a0	19.153		〃
Q42	剥片	1.5	1.45	0.25	0.5	硬質頁岩	B 2 a1	19.140		〃
Q43	剥片	2.5	1.65	0.5	1.5	硬質頁岩	B 2 a1	19.123	縦長剥片，打面部は調整されている	〃
Q44	剥片	0.7	0.95	0.1	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.035		〃
Q45	剥片	0.95	0.6	0.1	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.063	側片	〃
Q46	剥片	1.65	1.0	0.8	1.5	硬質頁岩	B 2 a1	19.290		〃
Q47	剥片	1.2	0.6	0.1	0.1	硬質頁岩	B 2 a1	19.032		〃
Q48	剥片	0.8	0.65	0.1	0.1	硬質頁岩	B 2 b1	19.112	剥片	〃
Q49	剥片	0.7	0.5	0.1	0.1	硬質頁岩	B 2 a1	19.069	剥片	〃
Q50	剥片	1.0	0.7	0.4	0.1	硬質頁岩	H 1 a0	19.189		〃
Q51	剥片	1.1	0.6	0.2	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.237	剥片	〃
Q52	剥片	1.5	0.85	0.1	0.1	硬質頁岩	B 1 a0	19.140		〃
Q53	剥片	0.9	1.45	0.3	0.3	硬質頁岩	B 1 a0	19.179		〃
Q54	剥片	1.4	0.8	0.15	0.1	黒曜石	B 2 a1	19.231		〃
Q55	剥片	1.2	1.35	0.2	0.3	硬質頁岩	B 1 a0	18.910		〃
Q56	剥片	0.7	1.5	0.3	0.2	黒曜石	B 1 a0	19.164	寸詰まりで薄手の縦長剥片	〃
Q57	剥片	1.1	1.85	0.3	0.4	硬質頁岩	B 1 a0	19.307		〃

（2）石器集中地点外出土遺物

当遺跡では，石器集中地点以外からも石器が出土している。ナイフ形石器2点，サイドスクレイパー1点，剥片6点である。これらについては，図示するとともに，剥離と調整の特徴を観察表に記載する。

石器集中地点外出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	剥離と調整の特徴	備考
第10図 Q58	剥片	3.9	1.6	0.4	1.9	硬質頁岩	表採	－	薄手の縦長剥片を素材とし，左側縁の上半部に連続する微細な剥離痕が認められる。打面部は欠損している。背面には主要剥離面側とは異なる方向の剥離が観察される。下半部は背面からの打により破損している。	遺構外　PL5
Q59	ナイフ形石器	3.3	1.2	0.8	2.5	硬質頁岩	表採	－	礫割れを起こした幅広の縦長剥片を素材とし，打面を基部に残している。左側縁に角度の高い刃潰し剥離を施し，右側縁の基部に微細な加工を施して，右側縁と先端部を刃部としている。	遺構外　PL5



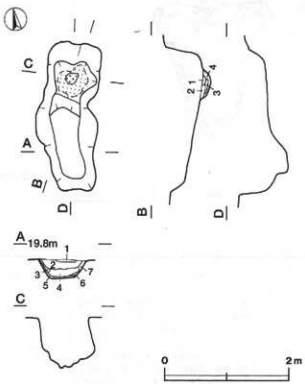
第10図　石器集中地点外遺物実測図

図版番号	種　別	計測値				石　材	出土地点		調整と調整の特徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		出土地区	標高(m)		
第10図										
Q60	ナイフ形石器	3.8	2.3	0.9	6.7	硬質頁岩	表採	−	厚手の剥片を素材とし、右側縁に分厚い刃潰し調整を施している。また左側縁基部は折面を残しており、刃潰し調整の代用としている。刃部は左側縁の上半部で、素面側には使用に起因すると考えられる微細な剥離痕が観察される。同様な微細な剥離痕は基部の平坦部にも認められ、この部分も刃部として機能していた可能性が高いと考えられる。	遺構外　PL5
Q61	剥　片	2.8	3.1	0.4	2.8	硬質頁岩	B 1 g0	19.342	幅広の剥片の末端部の一部。背面側からの力により縦方向と横方向に破損している。背面は主要剥離面側とは異なる方向の剥離が認められる。	遺構外　PL5

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点 出土地区	標高(m)	調整と調整の特徴	備考
第10図 Q62	剥片	1.5	1.9	0.7	1.1	黒曜石	B 2 g1	19.282	角礫の角を剥離した小型の横長剥片。打面調整や石核調整を行わずに剥離している。背面には礫面の残に、主要剥離面と90度向きの異なる調整が観察される。	遺構外 PL5
Q63	剥片	2.7	3.0	0.5	2.8	黒曜石	B 2 g1	19.271	礫面を打面として，背面にも大きく礫面を残す不定形な剥片。62と同様に石核調整を行わずに角礫を剥離した剥片である。	遺構外 PL5
Q64	剥片	3.2	4.0	1.2	10.1	黒曜石	B 2 h1	19.377	厚手の不定形な剥片。62,63と同様に打面調整や石核調整を行わずに剥離している。打面と左側面及び末端部に礫面を残している。	遺構外 PL5
Q65	剥片	1.6	2.4	0.6	1.1	黒曜石	B 2 i1	19.475	小形の横長剥片。打面は分厚くて礫面を残している。背面側には主要剥離面側とは反対方向の調整も観察される。	遺構外 PL5
Q66	ケイ質スレイパー	5.7	4.7	1.8	31.5	流紋岩	表採	－	極めて良質な流紋岩を用いて，分厚い不定形な横長剥片を素材にしている。打面は残している。末端部の裏面を中心に，石製縁末端部付近と末端部表面の一部に平坦を連続する調整を加えて，刃部を作り出している。	遺構外 PL5

2　縄文時代

遺構としては，炉穴3基を検出した。遺物としては，遺構外から早期のものと思われる土器片が出土した。以下，遺構について記載する。遺物については遺構外出土遺物において記載する。



第11図　第1号炉穴（SK19）実測図

（1）炉穴

第1号炉穴（SK19）（第11図）

位置　調査区域の中央部，B 2 i2区。

規模と平面形　長径2.4m，短径0.74mの不整楕円形で，深さは80cmである。

長径方向　N－12°－E

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦で，北部から南部に向かって外傾して立ち上がる。

炉　炉穴の中央部から北側に位置している。径50cmの円形状に，厚さ15cmの焼土が検出された。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック中量
2　にぶい赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック多量，焼土大ブロック・焼土粒子中量
3　暗赤褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック中量
4　暗赤褐色　ローム中ブロック・ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子少量

覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　灰黄褐色　粘土粒子多量
2　褐灰色　ローム粒子・粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物微量

3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　炭化物・炭化粒子多量，焼土粒子・ローム粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・灰少量
7　暗 赤 褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期は，限定できる遺物は出土していないが，遺構の性格から早期末のものと思われる。

第２号炉穴（SK27）（第12図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２a1区。

規模と平面形　長径1.39m，短径0.79mの不整楕円形で，深さは43cmである。

長径方向　N－26°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

炉　炉穴の中央部からやや北側に位置している。

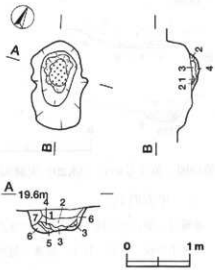
土層解説
1　明 赤 褐　色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック中量
2　暗 赤 褐　色　ローム小ブロック・焼土粒子少量
3　暗 赤 褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土大ブロック少量
4　黒　褐　色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子微量

覆土　７層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗 赤 褐　色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗 赤 褐　色　ローム小ブロック・焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　灰　褐　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
4　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
6　赤　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
7　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期は，限定できる遺物は出土していないが，遺構の性格から早期末のものと思われる。



第12図　第２号炉穴（SK27）実測図

第３号炉穴（SK29）（第13図）

位置　調査区域の北部，Ｂ１a0区。

規模と平面形　長径1.78m，短径0.81mの不整楕円形で，深さは62cmである。

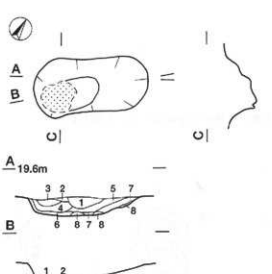
長径方向　N－35°－E

壁　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。南西部から北東部に向かって外傾して立ち上がる。

炉　炉穴の中央部からやや南西側に位置している。

炉土層解説
1　暗 赤 褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・焼土大ブロック・炭化粒子微量
2　暗 赤 褐　色　焼土粒子多量，ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
3　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土大ブロック・焼土中ブロック微量
4　赤　褐　色　焼土大ブロック多量
5　赤　褐　色　ローム大ブロック多量
6　暗 赤 褐　色　ローム粒子・焼土粒子多量
7　暗 赤 褐　色　焼土大ブロック多量，焼土粒子中量
8　赤　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子多量
9　にぶい赤褐色　焼土粒子中量



第13図　第３号炉穴（SK29）実測図

覆土　８層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
2	暗 赤 褐 色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
3	極暗赤褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，焼土中ブロック微量
4	暗 赤 褐 色	ローム粒子・焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
5	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
6	暗 赤 褐 色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
7	黒　褐　色	黒色土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
8	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期は，限定できる遺物は出土していないが，遺構の性格から早期末のものと思われる。

3　平安時代

遺構は，竪穴住居跡４軒，土坑２基が検出されている。このうち３軒の住居跡は，調査区域の北部から重複して検出されている。以下，遺構と遺物について記載する。

（1）竪穴住居跡

第１号住居跡（第14図）

位置　調査区域の北部，Ｂ２c2区。

重複関係　本跡は第４号住居に掘り込まれていることから，第４号住居よりも古い。

規模と平面形　本跡の壁の一部が第４号住居跡と重複している部分で検出されたことから，長軸5.35m，短軸3.85mの長方形と推定される。

主軸方向　N－11°－E

壁　壁高は15～47cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　確認された壁の下には，北東コーナー部から南壁際にかけて巡っている。上幅10～30cm，下幅５～15cm，深さ５～６cmで，断面形はU字形である。

床　平坦である。竈前面から南壁際にかけて踏み固められている。

ピット　２か所（P1・P2）。P1・P２は，長径46～48cm，短径38～40cmの不整楕円形，深さ26～34cmで，配置や規模から主柱穴と思われる。

P1土層解説

1	黒　褐　色	黒色土粒子中量，ローム粒子少量
2	暗　褐　色	黒色土粒子中量，ローム粒子少量
3	暗　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・黒色土粒子少量
4	灰　褐　色	ローム中ブロック中量，ローム粒子少量

P2土層解説

1	極暗褐色	黒色土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
2	黒　褐　色	ローム粒子・黒色土粒子少量，ローム小ブロック微量
3	暗　褐　色	ローム粒子・黒色土粒子少量，ローム小ブロック微量
4	暗　褐　色	ローム粒子・黒色土粒子少量

竈　北壁のほぼ中央部を壁外に128cmほど三角形状に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。壁外への掘り込みは大きい。天井部は崩落しており，西袖部と東袖部の一部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで長さ183cm，最大幅117cmである。火床部は，床面から10cmほど掘りくぼめられている。竈の内面は火熱を受けて赤変している。煙道は，火床面からほぼ垂直に立ち上がり，中位に段を持ち，さらに外傾して立ち上がる。竈の袖部から芯材として使用されたと思われる凝灰岩が出土している。

竈土層解説

1	黒　褐　色	黒色土粒子多量，焼土粒子少量
2	暗赤褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
3	黒　褐　色	焼土小ブロック・焼土粒子少量
4	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック微量
5	極暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
6	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化粒子・灰少量，焼土大ブロック微量
7	赤　灰　色	焼土粒子・灰中量，炭化粒子少量
8	にぶい暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
9	にぶい暗褐色	焼土粒子・灰多量，焼土小ブロック中量
10	赤　褐　色	焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土中ブロック中量
11	暗赤褐色	焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
12	暗　褐　色	ローム粒子・焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
13	にぶい暗褐色	焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子・粘土粒子微量
14	にぶい暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土大ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量
15	褐　　色	ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
16	暗　褐　色	ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
17	にぶい赤色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，粘土粒子少量
18	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
19	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
20	にぶい赤色	焼土小ブロック・焼土粒子少量，粘土粒子微量
21	極暗赤褐色	焼土粒子多量，砂少量
22	黒　褐　色	黒色土粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量

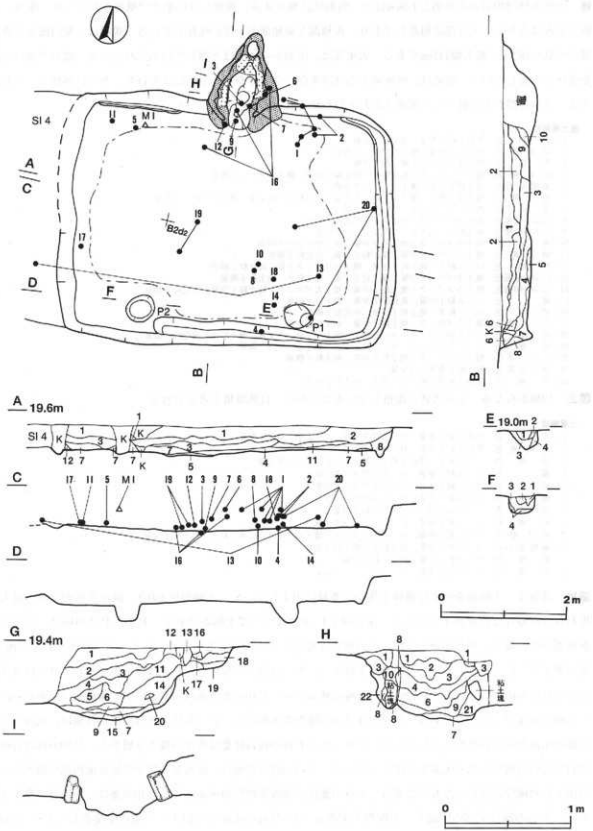
覆土　12層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

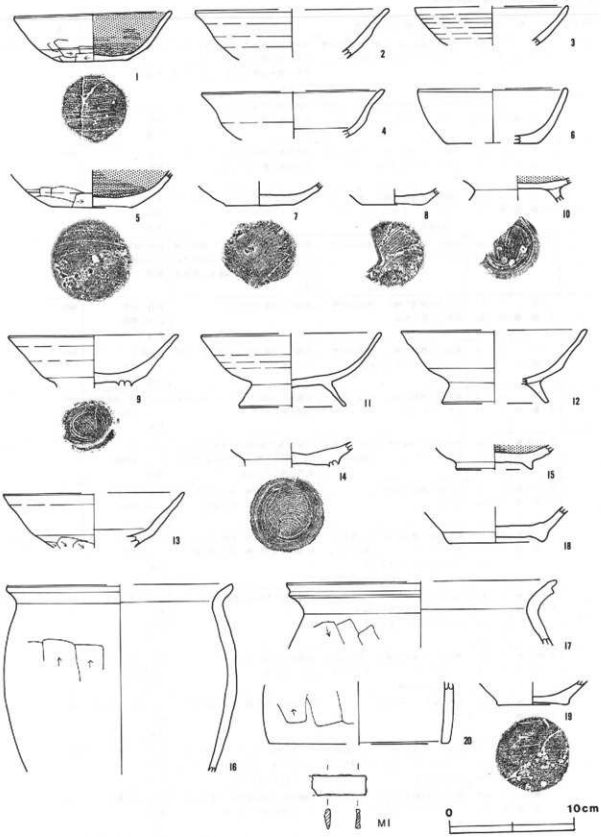
1	黒　　色	黒色土粒子多量，ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2	極暗褐色	黒色土粒子中量，ローム粒子少量
3	黒　褐　色	ローム粒子・黒色土粒子中量，ローム小ブロック少量
4	褐　　色	ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
5	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6	暗　褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
7	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
8	暗　褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
9	暗赤褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
10	極暗赤褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量
11	暗　褐　色	黒色土粒子中量，ローム粒子少量
12	暗　褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　遺物は，土師器を中心に遺構全体から多量に出土している。土師器片250点，鉄滓７点のほか，混入と思われる陶器片２点が出土している。第15図Ｐ1～P20はすべて土師器である。Ｐ１・Ｐ２の坏は，ともに竈東袖部外側の覆土上層と中層から出土した破片が接合したものである。Ｐ３・Ｐ６・Ｐ７の坏とＰ９の椀は，竈の覆土から出土している。Ｐ３は覆土下層から，Ｐ６は覆土上層から，Ｐ７は覆土中層から，Ｐ９は火床面からそれぞれ出土している。Ｐ12の高台付椀は袖部から，Ｐ16の甕は竈内の覆土中層と竈前面の床面から出土した破片が接合したものである。P-4の坏は南部壁際の床面から，Ｐ５の坏とＰ11の高台付椀は，北西コーナー部の床面からそれぞれ出土している。Ｐ８の坏とＰ18の高台付甕は南部の覆土下層から，Ｐ10の高台付椀とＰ14の高台付椀は南部の床面から出土している。Ｐ13の高台付椀は，南東部の覆土中層と南西部壁際の床面から出土した破片が接合したものである。Ｐ17の甕は，南西部壁際の床面から，Ｐ19の甕は，中央部の覆土下層から，Ｐ20の甑は東部の床面と，東壁際の床面及びＰ1付近の床面から出土した破片が接合したものである。Ｐ15の高台付椀は，覆土から出土している。Ｍ１の刀子は北西部壁際の覆土上層から出土している。

所見　本跡は，竈前面と北西部及び南東部を中心に炭化材や焼土が検出されていることから，焼失家屋の可能性が高い。本跡の時期は，出土土器から９世紀第４四半期～10世紀第１四半期と思われる。



第14図　第１号住居跡実測図



第15図　第１号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	坏 土師器	A 12.2 B 4.0 C 5.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き。黒色処理。底部・方向の手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	80%　PL6
2	坏 土師器	A [15.4] B (4.0)	体部から口縁部の破片。体部は外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部外面に強いロクロ目。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	20%
3	坏 土師器	A [12.4] B (3.2)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部外面に強いロクロ目。	長石 橙色 普通	20%
4	坏 土師器	A [14.6] B (3.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，中位に稜を持ち，口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	赤色粒子 橙色 普通	20%
5	坏 土師器	B (3.0) C 6.3	底部から体部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き。黒色処理。	長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	60%
6	坏 土師器	A [11.8] B 4.4 C [7.4]	底部から体部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 にぶい橙色 普通	30%
7	坏 土師器	B (1.8) C 5.4	底部から体部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し。	赤色粒子 にぶい橙色 普通	20%
8	坏 土師器	B (1.3) C 4.9	底部から体部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し。	長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	10%
9	高台付椀 土師器	A 13.4 B (4.1) E (0.3)	高台部及び口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し後，高台貼り付け。底部外面ヘラ当て痕。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	90%　PL6
10	高台付椀 土師器	B (1.8) E (0.8)	高台部の破片。高台は低く，ハの字状に開く。	底部回転糸切り離し後，高台貼り付け。内面ヘラ磨き。黒色処理。	石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	20%
11	高台付椀 土師器	A [14.1] B 4.9 D [8.6] E 2.0	高台部及び体部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上り，口縁部に至る。高台は高めでハの字状に開く。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し後，高台貼り付け。	石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	60%　PL6
12	高台付椀 土師器	A [14.7] B 5.9 D [8.2] E 1.8	高台部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上り，口縁部に至る。高台は高めでハの字状に開く。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 橙色 普通	30%　PL6
13	高台付椀 土師器	A [14.4] B (4.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は器肉が薄い。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	20%
14	高台付椀 土師器	B (2.0)	底部の破片。高台は欠損。	底部回転糸切り離し後，高台貼り付け。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	20%
15	高台付椀 土師器	B (1.9) D [6.0] E 0.6	高台部から体部の破片。高台は低くハの字状に開く。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し後，高台貼り付け。体部内面ヘラ磨き。黒色処理。	雲母・赤色粒子 橙色 普通	10%
16	甕 土師器	A [18.0] B (15.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し，口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面縦方向のヘラ削り。	長石・赤色粒子 橙色 普通	20%
17	甕 土師器	A [21.3] B (5.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し，口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面斜め方向のヘラ削り。	長石 明赤褐色 普通	10%　PL7

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 18	高台付発土師器	B（2.8） E（0.9）	高台部から体部の破片。高台は低く，器肉が厚い。	体部内・外面ナデ。底部切り離し後，高台貼り付け。	長石・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	10%
19	坏土師器	B（1.9） C 5.8	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部一方向の手持ちヘラ削り。	長石 橙色 普通	20%
20	甕土師器	B（5.0） C [14.3]	単孔式。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内面ナデ，外面縦方向のヘラ削り。	長石 にぶい橙色 普通	10%　PL6

図版番号	器種	計測値 刃長(cm)	刃幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
第16図M1	刀子	（4.4）	（1.6）	不明	不明	（0.1）	（7.5）	鉄	刃部先端及び茎欠損	PL8

第2号住居跡（第16図）

位置　調査区域の北部，B1d0区。

重複関係　本跡の東部は，第4号住居及び，第11号土坑に掘り込まれていることから，両遺構より古い。

規模と平面形　長軸3.55m，短軸4.38mの長方形と推定される。

主軸方向　N－85°－E

壁　壁高は5～7cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦である。竈の前面が踏み固められている。

ピット　12か所（P1～P12）。P1・P2は，長径35～36cm，短径30～31cmの不整楕円形，深さ40～46cmで，P3・P4は，長径21～38cm，短径17～18cmの不整楕円形，深さ51～50cmで，配置からP1～P4は主柱穴と思われる。P5～P7は，長径28～36cm，短径25～30cmの不整楕円形，深さ30～33cmで，P5～P7は配置から出入り口施設に伴うピットと思われる。P8～P12は，長径27～33cm，短径13～25cmの不整楕円形，深さ40～58cmで補助柱穴と思われる。

P1土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム大ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　黒褐色　ローム大ブロック中量，ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
4　暗褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム粒子微量

P2土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
2　黒褐色　ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

P6土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

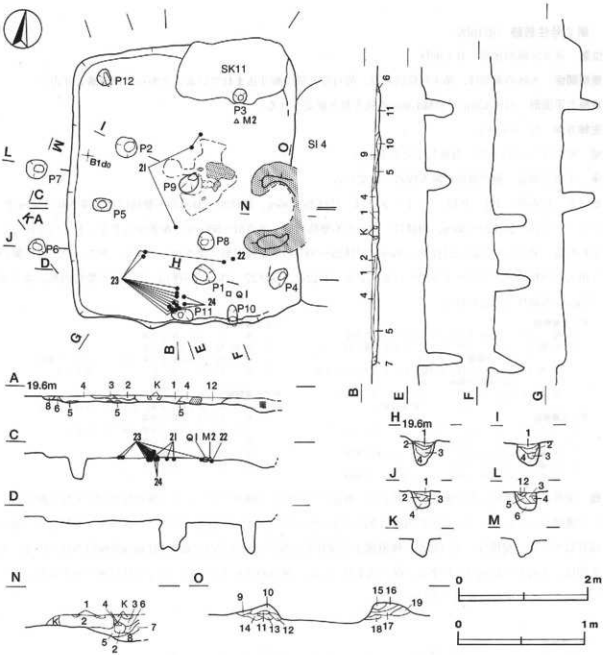
P7土層解説
1　灰褐色　粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　褐　色　ローム粒子少量
5　褐　色　粘土粒子微量
6　褐　色　ローム粒子少量

竈　東壁の中央部からやや南側に設置され，砂混じりの粘土で構築されている。煙道部は第4号住居跡の覆土上に構築されているため，範囲が明確に検出できなかった。天井部は崩落しており，西袖部と東袖部の一部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで現存する部分で長さ75cm，最大幅140cmが検出されている。火床部は，床面から13cmほどU字状に掘り込まれている。煙道の立ち上がりは，第4号住居跡との重複部分となっているため，明確に検出できなかった。

竈土層解説
1　灰褐色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・粘土小ブロック少量，焼土小ブロック微量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子少量，焼土大ブロック微量

3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子少量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子多量
6　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・焼土小ブロック少量
7　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
8　赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量
9　褐色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
10　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
11　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子微量
12　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
13　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
14　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
15　暗褐色　焼土粒子・粘土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子少量
16　黒褐色　焼土大ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
17　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
18　黒褐色　ローム大ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
19　暗褐色　ローム粒子・焼土大ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量

覆土　12層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。



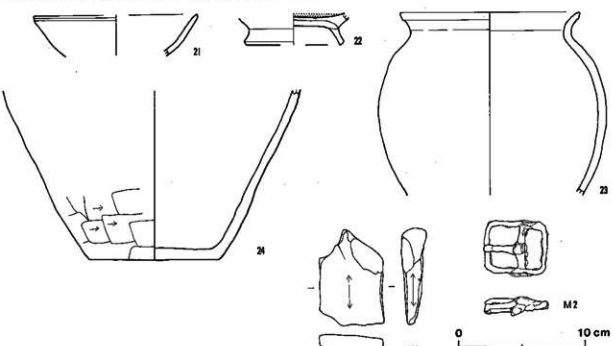
第16図　第２号住居跡実測図

土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
3 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
5 暗 褐 色 ローム中ブロック中量，ローム粒子少量，炭化物微量
6 褐 色 ローム粒子多量
7 暗 褐 色 黒色土粒子中量，ローム粒子少量
8 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量
9 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
10 暗 褐 色 ローム粒子少量
11 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子・粘土粒子少量，炭化物微量
12 暗赤褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量

遺物　土師器片65点のほか，鉄滓が2点出土している。第17図P21の坏は中央部の床面から，P22の高台付椀は竈前面の床面からそれぞれ出土している。P23の甕は竈前面と南部の床面から出土した破片が接合し，P24の甕は南部の床面から出土した破片が接合したものである。Q71の砥石は南部の床面から，M2の鉄製品（鉸具）は，北東部の床面から出土している。

所見　竈の前面から焼土と粘土が検出されている。これは，竈材と竈内の焼土と推定される。本跡の時期は，出土土器から10世紀第1四半期～第2四半期と思われる。



第17図　第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 21	坏 土師器	A (13.0) B (3.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。器内は薄い。	長石 橙色 普通	20%　PL6
22	高台付椀 土師器	B (2.5) D (7.6) E 1.3	高台部片。高台は高めで，内彎気味に開く。	底部内面黒色処理。底部切り離し後，高台貼り付け。	長石・石英・赤色粒子 淡黄橙色 普通	20%
23	甕 土師器	A 14.2 B (14.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し，口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ，外面縦方向のヘラ削り。	長石・雲母 橙色 普通	40%　PL6
24	甕 土師器	B (13.3) C 10.4	底部から体部片。平底。体部は外開して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。体部ド離横方向の手持ちヘラ削り。	長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	30%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第17図Q71	砥石	(7.6)	5.0	2.0	(77.4)	凝灰岩	剥片，2面使用	PL.7

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第17図M2	鉸具	5.0	4.5	1.7	14.4	鉄	平面形方形，側鉄は先端ほど細い	馬具か	PL.8

第3号住居跡（第18図）

位置　調査区域の中央部，B2ム区。

規模と平面形　長軸2.2m，短軸2.1mの方形と推定される。

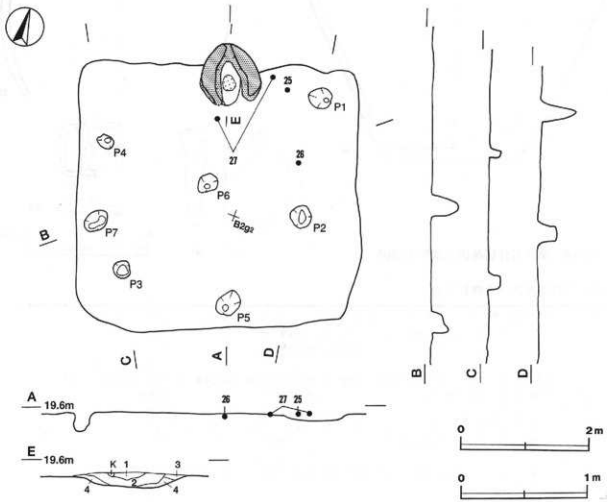
主軸方向　N－19°－W

壁　壁高は4～5cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦である。踏み固められた部分は検出されなかった。

ピット　7か所（P1～P7）。P1・P2は，径33～35cmの不整円形，深さ29～53cm，P3・P4は，長径23～27cm，短径19～23cmの不整楕円形，深さ19～20cmである。P1～P4は，配置や規模から主柱穴と思われる。P5は，長径40cm，短径32cmの不整楕円形，深さ29cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと思われる。P6・P7は，長径16～18cm，短径14～15cmの不整楕円形，深さ28～43cmで，補助柱穴と思われる。

竈　北壁のほぼ中央部を壁外に45cmほど半円状に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。天井部は崩落



第18図　第3号住居跡実測図

しており，西袖部と東袖部の一部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで長さ98cm，最大幅93cmである。火床部は，床面から10cmほど逆台形状に掘りくぼめられており，火熱を受けて赤変している。煙道は，火床面から緩やかに外傾して立ち上がる。

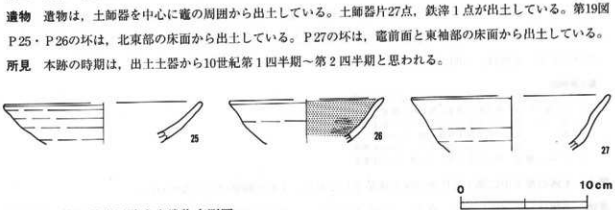
竈土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
2　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック微量
3　暗赤褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
4　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量

覆土　遺構の掘り込みがごく浅く，土層の観察はできなかった。

遺物　遺物は，土師器を中心に竈の周囲から出土している。土師器片27点，鉄滓１点が出土している。第19図Ｐ25・Ｐ26の坏は，北東部の床面から出土している。Ｐ27の坏は，竈前面と東袖部の床面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から10世紀第１四半期～第２四半期と思われる。



第19図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 25	坏 土師器	A (15.4) B (3.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。やや器肉が厚い。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・赤色粒子 明褐色 普通	20%
26	坏 土師器	A (12.0) B (3.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。内面へラ磨き。黒色処理。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	20%
27	坏 土師器	A (15.4) B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	20%

第４号住居跡（第20図）

位置　調査区域の北部，Ｂ２d2区。

重複関係　本跡は第１号住居跡及び第２号住居跡を掘り込み，また第22号土坑に掘り込まれていることから，第１・２号住居跡よりも新しく，第22号土坑より古い。

規模と平面形　竈の残存部などから，長軸4.3m，短軸3.7mの長方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－79°－Ｅ

壁　壁高は45cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　確認された壁の下には，西壁から南西コーナー部にかけて巡っている。上幅12～22cm，下幅３～６cm，深さ10cmで，断面形はＵ字形である。

床　平坦である。踏み固められた部分は検出されなかった。

ピット　１か所。Ｐ１は，径28～30cmの不整円形，深さ30cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴　北西コーナー部に付設され，長径96cm，短径78cmの不整楕円形，深さ60cmで断面形はU字形である。

貯蔵穴土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
2	暗　褐	色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3	黒　褐	色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4	暗　褐	色	ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
5	褐	色	ローム粒子少量
6	暗　褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
7	褐	色	ローム粒子多量
8	暗　褐	色	ローム粒子中量
9	暗　褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
10	暗　褐	色	焼土粒子少量，ローム粒子微量

竈　第１号住居に掘り込まれているため，焼土と粘土が残存するだけである。東壁のほぼ中央部を壁外に27cmほど掘り込み，砂まじりの粘土で構築されていたと推定される。天井部は崩落している。袖部は一部が残存するだけである。規模は，不明である。

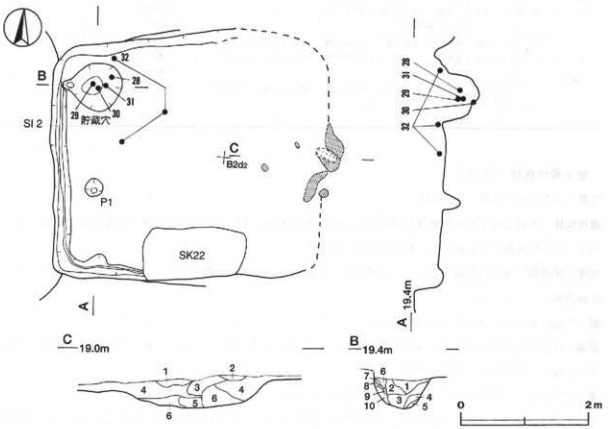
竈土層解説

1	にぶい赤褐	色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2	明　褐　灰	色	粘土粒子多量，焼土粒子微量
3	褐　灰	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
4	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
6	にぶい褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量

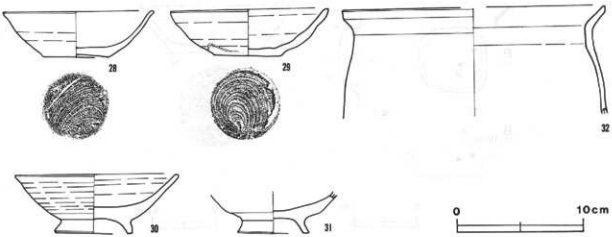
覆土　本跡の覆土中に第１号住居の床が構築されており，土層の観察はできなかった。

遺物　遺物は，土師器片46点，鉄滓２点が出土している。第21図Ｐ28～Ｐ31の坏は，いずれも貯蔵穴の覆土から出土している。Ｐ32の坏は，北東部の覆土下層から出土している。

所見　竈前面と北西部及び南東部を中心に炭化材や焼土が検出されていることから，焼失家屋の可能性が高い。本跡の時期は，出土土器から10世紀第２四半期～第３四半期と思われる。



第20図　第４号住居跡実測図



第21図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測(dim)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 28	坏 土師器	A 11.8 B 3.7 C 5.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し。	長石・赤色粒子に赤い橙色 普通	98%　PL6
29	坏 土師器	A 12.4 B 3.8 C 5.4	口縁部一部欠損。やや突出気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。器肉はやや厚い。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し。	長石・赤色粒子に赤い橙色 普通	90%　PL6
30	高台付椀 土師器	A 12.8 B 4.8 D 6.0 E 1.1	口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。高台は低くハの状に開く。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し後，高台貼り付け。	長石・赤色粒子に赤い黄褐色 普通	98%　PL6
31	高台付椀 土師器	B（3.3） D 5.6 E 1.3	高台部から体部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。高台は低くハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し後，高台貼り付け。	長石・雲母 橙色 普通	20%
32	甕 土師器	A〔20.6〕 B（8.5）	体部から口縁部の破片。体部は内彎し，口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・赤色粒子に赤い橙色 普通	10%　PL7

（２）土坑

第14号土坑（第22図）

位置　調査区域の北部，Ｂ２b1区。

規模と平面形　長径1.07m，短径1.01mの不整円形で，深さは50cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

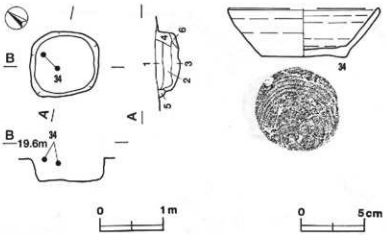
覆土　６層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・砂少量，炭化物微量
2　黒褐色　黒色土粒子中量，ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
4　灰褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　褐　色　ローム粒子多量

遺物　土師器片２点，須恵器片１点が出土している。第22図Ｐ34の土師器坏は，北部の覆土上層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から９世紀第４四半期～10世紀第１四半期と思われる。



第22図　第14号土坑・出土遺物実測図

第14号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 34	坏 土師器	A [11.8] B 3.8 C 6.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り離し。	長石・石英・赤色粒子にぶい橙色 普通	80%　PL7

第15号土坑（第23図）

位置　調査区域の北部，B 1 c0区。

規模と平面形　長径1.35m，短径1.32mの不整円形で，深さは60cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　15層からなる。ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

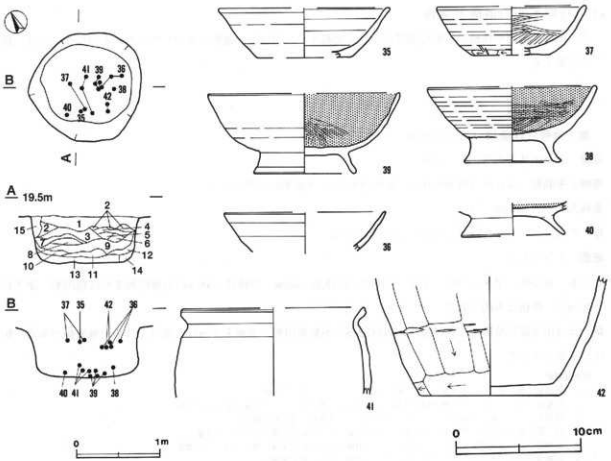
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・炭化物少量
3　黒　褐　色　炭化材・炭化物中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗 赤 灰 色　炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子中量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
7　極暗赤褐色　炭化粒子中量，粘土粒子少量，焼土粒子微量
8　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子・黒色土粒子中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量
10　暗 赤 褐 色　焼土小ブロック・焼土粒子・灰少量
11　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，ローム大ブロック微量
12　極暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量
13　極暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰中量
14　極暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
15　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　土師器片164点が出土している。第23図P35～P37の坏とP42の甕は，覆土上層から出土している。P38～P40の高台付椀と，P41の甕は覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から10世紀第1四半期～10世紀第2四半期と思われる。

第15号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 35	坏 土師器	A [13.6] B 4.0 C [7.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	20%　PL7



第23図　第15号土坑・出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 36	坏 土師器	A (12.8) B (3.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。	長石 にぶい赤褐色 普通	20% PL7
37	坏 土師器	A (11.8) B 3.9 C [6.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。やや器肉は厚い。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	10%
38	高台付椀 土師器	A (13.4) B 6.1 D 7.6 E 1.4	口縁部一部欠損。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部に至る。高台は高めでラッパ状に開く。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き後，黑色処理。底部切り離し後，高台貼り付け。体部外面に強いロクロ目。	長石・雲母・赤色粒子 橙色 普通	90% PL7
39	高台付椀 土師器	A (15.3) B 6.4 D 8.0 E 1.7	高台部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。高台は高めでハの字状に開く。器肉は薄い。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き後，黑色処理。底部切り離し後，高台貼り付け。	長石・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	40% PL7
40	高台付椀 土師器	B (2.6) D [8.2] E 1.6	高台部の破片。高台は高めでハの字状に開く。器肉は薄い。	底部切り離し後，高台貼り付け。黑色処理。	長石 橙色 普通	10%
41	甕 土師器	A (14.6) B (7.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し，口縁部は強く外反する。口縁端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	赤色粒子 にぶい橙色 普通	10% PL7
42	甕 土師器	B (9.5) C 11.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	体部内面ナデ。体部外面下位縦方向のヘラ削り，下端横方向のヘラ削り。	長石・石英・赤色粒子 黄橙色 普通	30%

4　時期不明の遺構と遺物

ここでは，時期や性格が不明な遺構について記載する。土坑は，遺物が出土していないものについては一括して記載する。

(1) 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第24・25図）

位置　調査区域の南部，C 2 a1区。

規模と平面形　現存値は東西9.80m，南北8.80mで，平面形は不明である。

長軸方向　(N－88°－E)

壁　壁高は80cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

ピット　16か所（P1～P16）。P1～P16は，長径20～64cm，短径17～48cmの不整円形または楕円形，深さ17～70cmで，性格は不明である。

炉　ほぼ中央部に位置し，長径92cm，短径52cmの不整楕円形，床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤変している。

炉土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・焼土中ブロック中量，炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
4　褐　色　焼土大ブロック多量，焼土中ブロック中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量
5　暗褐色　ローム大ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
6　暗褐色　ローム大ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

覆土　14層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

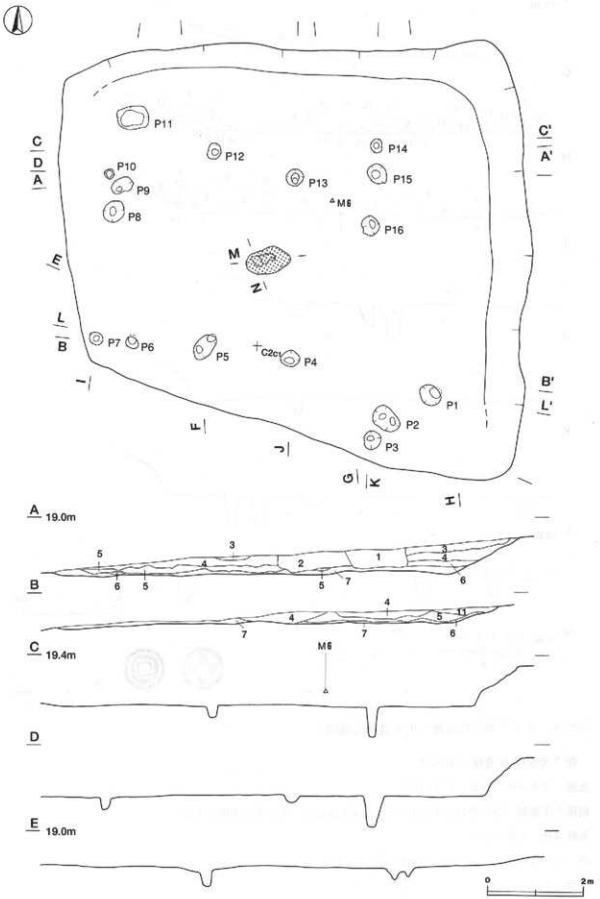
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子微量
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・粘土粒子少量
5　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量
6　黒褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
7　暗褐色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量
8　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・ローム粒子微量
9　黒褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
10　暗褐色　ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・ローム粒子少量，粘土粒子微量
11　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
12　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
13　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
14　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物・粘土粒子微量

遺物　土師器片18点，須恵器片1点の他，古銭1点が出土している。第26図M 6の古銭は，中央部の覆土中層から出土している。

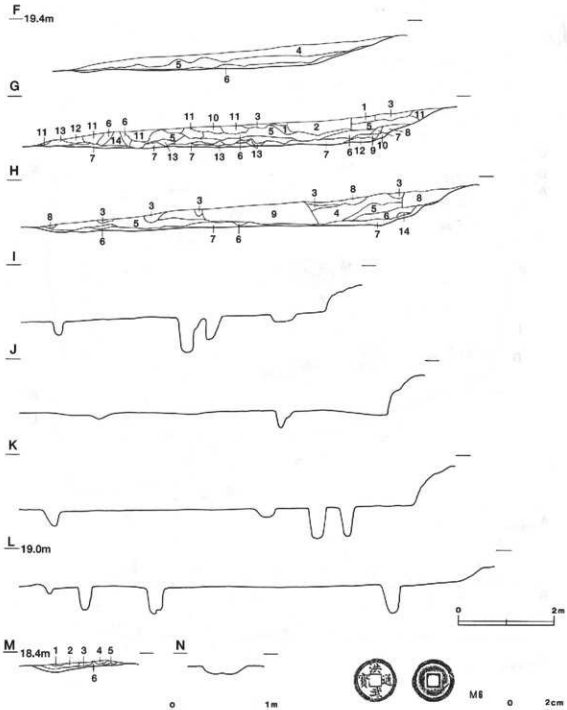
所見　本跡の時期は，古銭1点が出土しているが，判断できる遺物がなく不明である。

第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値				初鋳年代（西暦）	備　考
		長さ(cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量(g)		
第25図M 6	銭貨	2.3	0.2	0.6×0.6	2.8	明（1368年）	PL.8



第24図　第１号竪穴状遺構実測図(1)



第25図　第１号竪穴状遺構・出土遺物実測図(2)

第２号竪穴状遺構（第26図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２e1区。

規模と平面形　現存値は，東西4.20m，南北1.28mで，平面形は不明である。

長軸方向　不明である。

壁　壁高は10cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

ピット　２か所（Ｐ１・Ｐ２）。Ｐ１は，長径48cm，短径40cmの不整楕円形で，深さ50cm，Ｐ２は，長径50cm，

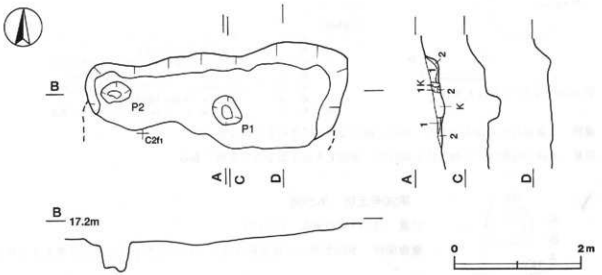
短径30cmの不整楕円形で，深さ46cmである。P１・P２とも性格は不明である。

覆土　２層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　粘土小ブロック中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　遺物は，出土していない。

所見　本跡の時期は，出土遺物がなく不明である。



第26図　第２号竪穴状遺構実測図

（２）土坑

第10号土坑（第27図）

位置　調査区域の南部，Ｃ２d1区。

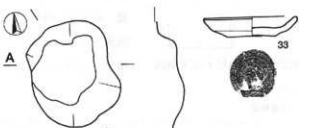
規模と平面形　長径1.65m，短径1.29mの不整楕円形で，深さは46cmである。

長径方向　Ｎ－15°－Ｗ

壁　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　４層からなる。不自然な堆積状況から，１・２層は人為堆積，３・４層は自然堆積と考えられる。



第27図　第10号土坑・出土遺物実測図

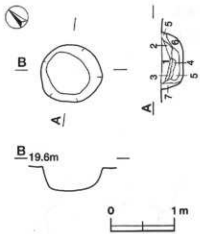
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　土師質土器の皿１点が出土している。第27図Ｐ33の土師質土器の皿は，覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，土師質土器の皿が覆土中から出土しているが，混入の可能性があり限定するのは難しい。

第10号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第27図 33	皿 土師質土器	A　7.4 B　1.6 C　3.6	口縁部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り離し。	雲母 に赤い橙色 良好	100%　PL7



第28図　第13号土坑実測図

第13号土坑（第28図）

位置　調査区域の北部，B 1 d7区。

規模と平面形　径0.92～0.95mの不整円形で，深さは39cmである。

壁　緩やかに外傾して立ち上がる。

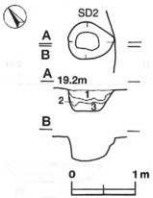
底面　平坦である。

覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量

遺物　土師器片8点が出土しているが，細片で図示できるものはなかった。

所見　本跡の時期は，土師器片が細片で，限定できる土器がなく不明である。



第29図　第20号土坑実測図

第20号土坑（第29図）

位置　調査区域の東部，B 2 j4区。

重複関係　本跡が第2号溝を掘り込んでいることから，第2号溝よりも新しい。

規模と平面形　長径0.74m，短径0.58mの不整楕円形で，深さは39cmである。

長径方向　N－85°－E

壁　緩やかに外傾して立ち上がる。

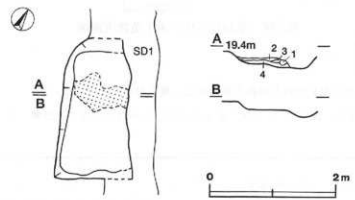
底面　平坦である。

覆土　3層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量
3　褐　暗　褐　色　ローム中ブロック・ローム粒子多量

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期は，出土土器がなく不明である。



第30図　第30号土坑実測図

第30号土坑（第30図）

位置　調査区域の北東部，B 2 d5区。

重複関係　本跡は，第1号溝に掘り込まれていることから，第1号溝よりも古い。

規模と平面形　長軸2.2m，短軸（1.1）mで長方形と推定される。

長軸方向　N－30°－W

壁　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。底面から焼土が検出されている。

焼土土層解説
1　暗赤灰色　焼土粒子多量，焼土中ブロック中量，炭化物少量
2　にぶい赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子多量
3　灰　赤　色　焼土粒子多量
4　赤　褐　色　ローム粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子少量

遺物　遺物は出土していない。

所見　本跡は，他の土坑と異なり平面形が長方形であるのが特徴である。性格は不明である。本跡の時期は，出土土器がなく不明である。

第31号土坑（第31図）

位置　調査区域の北東部，B 2 c4区。

重複関係　本跡は，第１号溝に掘り込まれていることから，第１号溝よりも古い。

規模と平面形　長軸2.1m，短軸(0.84)mで長方形と推定される。

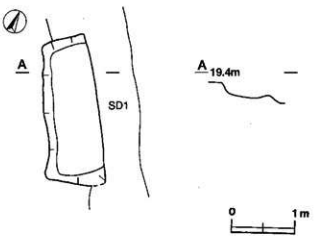
長軸方向　N－35°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

遺物　遺物は，出土していない。

所見　本跡の時期は，出土土器がなく不明である。



第31図　第31号土坑実測図

（３）溝

第１号溝（第34・39図）

位置　調査区域の北部，A 2 i2～B 2 f6区。

重複関係　本跡が第30号及び第31号土坑を掘り込んでいることから，これらの遺構より新しい。

規模と形状　本跡は，北側と南側が調査区域外となっている。確認できた長さは33.6mで，上幅0.75～1.50m，下幅0.17～0.40m，深さは約26～34cmである。断面形は逆台形である。

方向　B 2 f6区から北西（N－28°－W）に直線的に延びる。

覆土　A断面は３層，B断面は７層，C断面は３層，D断面は５層に分層される。いずれもロームブロックを含み，また不自然な堆積状況から人為堆積と考えられる。

A断面土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
2　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
3　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量

B断面土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量
2　黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
3　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
4　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
5　暗 褐 色　ローム粒子多量
6　暗 褐 色　ローム粒子中量，砂粒少量
7　暗 褐 色　ローム粒子多量

C断面土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子少量
2　黒　　色　ローム粒子少量
3　極暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

D断面土層解説
1　暗 褐 色　焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・黒色土小ブロック少量
3　黒 褐 色　ローム粒子・黒色土小ブロック中量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5　暗 褐 色　ローム粒子多量

遺物　土師器片22点，鉄滓１点が覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，土師器片が細片で，時期を限定できる遺物がなく不明である。

第２号溝（第32・33図）

位置　調査区域の東部，Ｂ２f7～Ｃ２f3区。

重複関係　本跡が第３号及び第４号溝を掘り込み，第20号及び第21号土坑に掘り込まれていることから，第３号及び第４号溝より新しく，第20号及び第21号土坑より古い。また本跡の上に第１号道路跡が検出されており，第１号道路跡より古い。

規模と形状　本跡は，北側と南側が調査区域外に延びている。確認できた長さは46.0ｍで，上幅1.85～5.25ｍ，下幅1.10～4.10ｍ，深さは約35～75cmである。断面形はＵ字形である。

方向　Ｃ２f3区から北西（Ｎ－20°－Ｗ）に延び，Ｃ２d2区で彎曲し，北東方向（Ｎ－20°－Ｅ）に延びる。

覆土　Ａ断面は６層，Ｂ断面は５層，Ｃ断面は６層，Ｄ断面は９層に分層される。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

Ａ断面土層解説
1　黒褐色　砂粒中量，ローム粒子少量
2　暗褐色　炭化粒子・ローム粒子・黒色土小ブロック少量
3　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子・砂粒少量
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

Ｂ断面土層解説
1　黒褐色　炭化粒子・ローム粒子・砂粒・粘土粒子少量
2　黒褐色　粘土粒子・黒色粒子少量，ローム粒子微量
3　黒褐色　黒色粒子多量，黒色小ブロック中量，ローム粒子少量
4　極暗褐色　ローム粒子中量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量

Ｃ断面土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロック少量
3　黒褐色　黒色土小ブロック・黒色土粒子中量，ローム粒子少量
4　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子多量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量

Ｄ断面土層解説
1　黒褐色　黒色土粒子中量，焼土粒子・ローム粒子少量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
3　黒褐色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子微量
4　黒褐色　黒色土小ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，粘土粒子微量
7　黒　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
8　黒褐色　焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子中量
9　黒褐色　ローム粒子中量

遺物　土師器片16点，須恵器片５点，砥石１点，鉄釘１点が出土している。Ｑ73の砥石及びＭ３の釘は覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，土師器片及び須恵器片が細片で，限定できる遺物がなく不明である。

第３号溝（第34・39図）

位置　調査区域の西部，Ｂ１h9～Ｂ２i5区。

重複関係　本跡は，第２号溝に掘り込まれていることから，第２号溝よりも古い。

規模と形状　本跡は，東側と西側が調査区域外に延びている。確認できた長さは25.1ｍで，上幅1.10～1.90ｍ，下幅0.30～0.60ｍ，深さは約10cmである。断面形はＵ字形である。

方向　Ｂ１h9区から西（Ｎ－98°－Ｅ）に直線的に延び，Ｂ２i5区で第２号溝及び第１号道路跡と交差する。

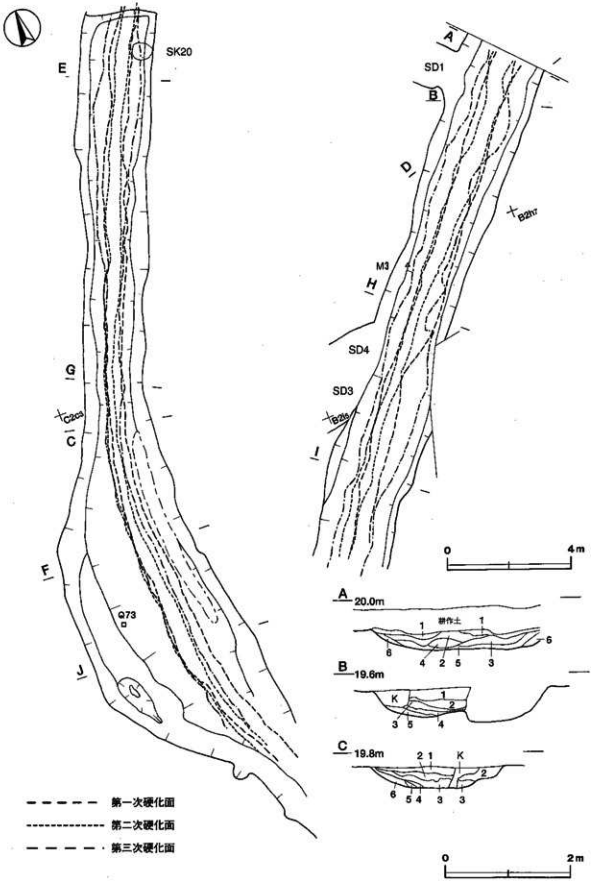
覆土　Ｇ・Ｈ断面とも２層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

Ｇ断面土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，砂粒少量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量

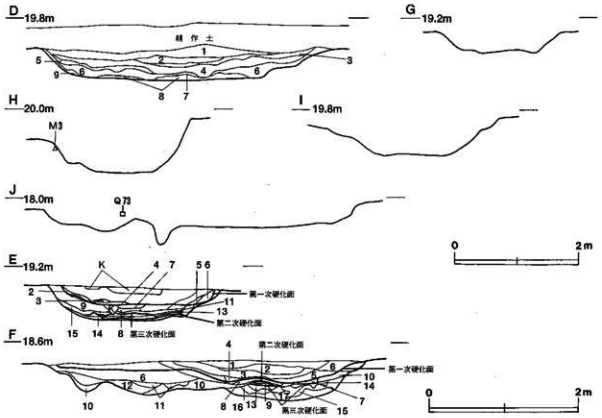
Ｈ断面土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・砂粒少量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　土師器片６点，刀子１点，不明銅製品１点が出土している。Ｍ４の刀子，Ｍ５の不明銅製品はいずれも覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，土師器片が細片で，限定できる遺物がなく不明である。



第32図　第２号溝・第１号道路跡実測図(1)



第33図　第２号溝・第１号道路跡実測図(2)

第４号溝（第34・39図）

位置　調査区域の西部，Ｂ１g8～Ｂ２h5区。

重複関係　本跡は，第２号溝に掘り込まれていることから，第２号溝よりも古い。

規模と形状　本跡は，西側と東側が調査区域外に延びている。確認できた長さは27.3mで，上幅0.50～0.75m，下幅0.12～0.2m，深さは約15cmである。断面形は逆台形である。

方向　Ｂ１g8区から東（Ｎ－98°－Ｅ）に直線的に延び，Ｂ２h5区で第２号溝及び第１号道路跡と交差する。

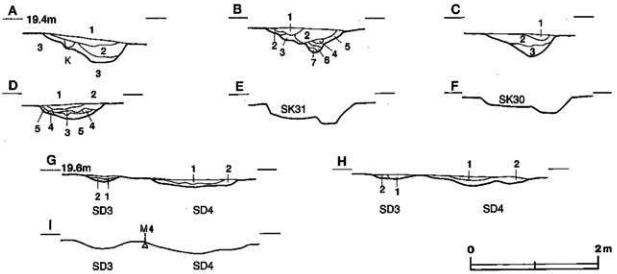
覆土　Ｇ・Ｈ断面とも２層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

G断面土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量

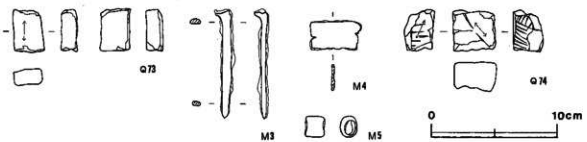
H断面土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　土師器片９点，砥石１点が出土している。Q74の砥石は覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，限定できる遺物がなく不明である。



第34図　第１・３・４号溝実測図



第35図　第２～４号溝出土遺物実測図

第２号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
第35図Q73	砥石	(3.3)	2.4	1.3	(18.3)	凝灰岩	破片，３面使用	PL8

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
第35図M３	釘	8.6	1.6	0.8	1.36	鉄	頭部は偏平に折り曲げられている。断面長方形	PL8

第３号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	刃幅(cm)	基長(cm)	茎幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
第35図M４	刀子	(4.0)	(2.3)	不明	不明	(0.3)	(4.0)	鉄	刀部の先端部欠損	PL8

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
第35図M５	不明銅製品	1.5	1.7	0.1	3.5	銅	中央部はわずかに膨らむ	

第４号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
第35図Q74	砥石	(3.2)	3.4	2.4	(33.6)	凝灰岩	破片，２面使用	PL8

（4）道路跡

第1号道路跡（第32・33図）

位置　調査区域の東部，B 2 f7～C 2 f4区。

重複関係　本跡は，第1号溝の覆土から検出されており，第1号溝より新しい。また，第3号及び第4号溝を掘り込み，第20号及び第21号土坑に掘り込まれていることから，第3号及び第4号溝より新しく，第20号及び第21号土坑より古い。

規模と形状　本跡は，南北に延び，北側と南側が調査区域外に延びている。路面は，第1次硬化面から第3次硬化面まで検出されている。確認できた長さは45.5mで，第1次硬化面は，幅1.50～2.50m，深さ6～30cm，第2次硬化面は，幅0.32～0.72m，深さ28～32cm，第3次硬化面は，幅0.32～0.72m，深さ30～35cmである。

方向　C 2 f4区から北西（N－20°－W）に延び，C 2 d2区で湾曲し，さらに北東（N－20°－E）に延びる。

覆土　E断面は15層，F断面は17層に分層される。E断面は1～3層が自然堆積，4～15層が人為堆積，F断面は，1～6層が自然堆積，7～17層が人為堆積と思われる。

E断面土層解説

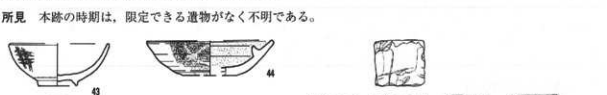
1　黒褐色　黒色土粒子中量，ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　黒　色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子少量
4　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　黒褐色　黒色土中ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
8　黒褐色　黒色土中ブロック・小ブロック中量，ローム中ブロック少量
9　褐　色　ローム粒子多量
10　暗褐色　ローム粒子少量
11　極暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロック少量
12　黒褐色　黒色土小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量
13　黒褐色　黒色土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
14　黒褐色　黒色土粒子中量，ローム粒子少量
15　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量

F断面土層解説

1　黒褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量
2　極暗褐色　ローム粒子・黒色土小ブロック少量
3　黒褐色　黒色土粒子中量，ローム粒子・黒色土小ブロック少量
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子多量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，ローム中ブロック微量
8　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
9　黒褐色　黒色土粒子多量，ローム粒子少量
10　褐　色　ローム粒子多量
11　暗褐色　ローム小ブロック多量，ローム粒子中量
12　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量
13　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
14　褐　色　ローム粒子多量，粘土粒子微量
15　褐　色　ローム粒子中量
16　褐　色　ローム粒子多量
17　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子微量

遺物　陶器の破片2点，土師器片3点，須恵器片1点のほか，砥石1点が出土している。P43・44の陶器片，Q75の砥石1点はいずれも覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，限定できる遺物がなく不明である。



第36図　第1号道路跡出土遺物実測図

第1号道路跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 43	染付丸碗 陶器	A［7.7］ B 3.4 D 3.0 E 0.4	体部一部欠損。高台は低く，真下にのびる。体部は内彎しながら立ち上がる。	染付。井形文。	黒色微粒子 (胎土)灰白色 (釉)灰白色	60% 肥前系か

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 44	灯明受皿 陶器	A〔9.8〕 B 2.7 C〔4.2〕	底部から口縁部の破片。内側に受け部が付く。	口縁部内・外面に鉄釉。	(胎土)黄褐色 (釉)赤褐色	25%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第36図Q75	砥石	(3.8)	3.9	3.6	(94.9)	砂岩	破片，3面使用	PL8

（5）ピット群

当遺跡の北部からピット群が検出されている。時期や性格については不明である。

第1号ピット群（第39図）

位置　調査区域の北部，B1a0区からB2f3区。

規模と形状　南北28m，東西32mの長方形の範囲内に67か所のピットを確認した。ピットの平面形は，長径23～52cm，短径21～30cmで円形あるいは楕円形を呈しており，深さは20～80cmである。

所見　ピットの配列に規則性は見られない。出土遺物はなく，時期・性格ともに不明である。

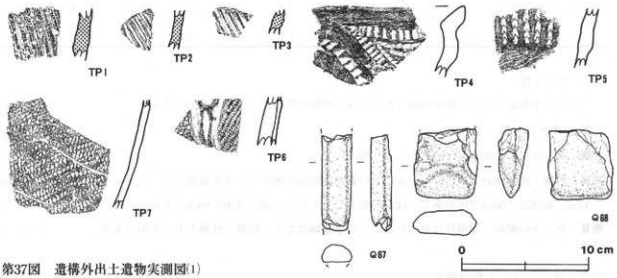
表5　第1号ピット群計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
P 1	32	30	55	石1	21	44	31	26		41	39	27	59	土師器片1
2	33	31	42		22	35	32	26		42	42	35	48	
3	36	30	36		23	18	18	35		43	70	64	41	
4	35	33	35		24	30	28	44		44	50	41	62	
5	35	32	41		25	39	28	30		45	47	38	20	
6	36	31	41		26	34	26	39		46	35	28	37	
7	58	39	61		27	68	36	40		47	44	36	28	
8	47	32	52	土師器片1	28	45	41	80		48	54	40	29	
9	39	32	46	土師器片4	29	38	31	53		49	52	46	34	
10	39	36	50	土師器片6	30	34	26	61		50	45	35	22	
11	36	28	59	土師器片1	31	33	31	37		51	42	34	29	
12	26	26	32		32	39	36	62		52	80	71	20	土師器片1
13	41	33	50		33	29	29	43		53	39	37	72	
14	32	27	34	土師器片1	34	71	42	53		54	45	36	60	
15	35	33	37		35	58	47	38		55	48	40	51	
16	28	28	39		36	29	33	43		56	45	38	48	
17	38	29	33		37	30	30	38		57	33	31	41	
18	41	30	38		38	36	36	47		58	41	35	34	
19	36	32	50		39	40	35	56	土師器片1	59	36	29	46	
20	60	59	15		40	39	30	56	鉄滓2	60	41	40	46	

5　遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない遺物が何点か出土している。縄文土器７点，陶磁器４点，石製品７点，金属製品５点（鉄製品４，銅製品１），古銭１点などである。

ここでは，これらの出土遺物を一括して実測図と観察表（第37・38図）で記載する。

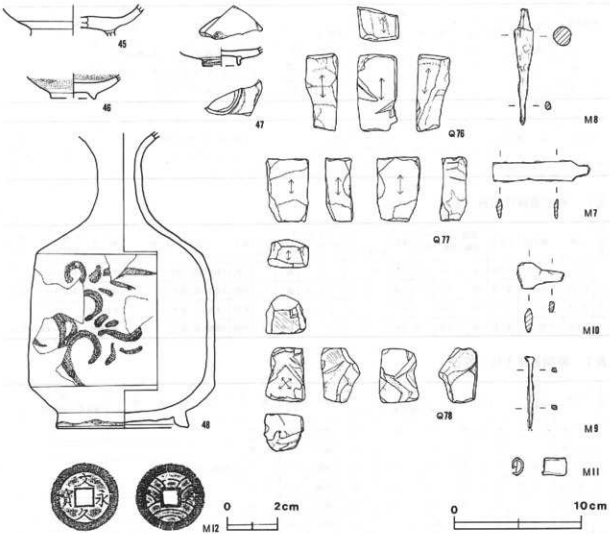


第37図　遺構外出土遺物実測図(1)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第37図 TP１	深鉢 縄文土器	B（4.4）	胴部片。内・外面に条痕文を施している。	長石 橙色 普通	5%	PL8
TP２	深鉢 縄文土器	B（3.4）	胴部片。内・外面に条痕文を施している。	長石 赤褐色 普通	5%	PL8
TP３	深鉢 縄文土器	B（2.4）	胴部片。内・外面に条痕文を施している。	長石 暗赤褐色 普通	5%	PL8
TP４	深鉢 縄文土器	B（6.4）	口縁部片。隆帯に沿って幅広の爪形文を施している。区画内には結節沈線文を施している。	長石・石英・雲母・赤色粒子 明褐色 普通	5%	PL8
TP５	深鉢 縄文土器	B（5.2）	胴部片。上位にペン先状の工具による連続刺突文が施されている。	赤色粒子 明褐色 普通	5%	PL8
TP６	深鉢 縄文土器	B（4.2）	胴部片。結節縄文を連文に２本の隆帯が縦位に貼り付けられている。	長石 にぶい褐色 普通	5%	PL8
TP７	深鉢 縄文土器	B（9.2）	胴部片。単節縄文LRを施し，条線文を施している。	長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	5%	PL8

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 45	高台付椀 土師器	B（2.5）	高台部から体部片。高台はハの字状に開く。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部糸切り離し後，高台貼り付け。	長石・赤色粒子 橙色 普通	10%
46	椀 瓦器	B（2.0） D［3.4］ E　0.4	高台部から体部片。体部は内彎しながら立ち上がる。高台は低く真下にのびる。	見込みは同心円状に無釉。	白色粒子 (胎土)灰オリーブ色 (釉)灰白色	10%
47	染付椀 磁器	B（1.5） D［2.8］ E　0.5	高台部から体部片。高台はやや外反する。	内・外面に釉。	黒色の微粒子 (胎土)灰白色 (釉)灰白色	5%



第38図　遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 48	徳利	B (23.4) D 10.2 E 1.3	体部及び口縁部一部欠損。	染付。内・外面に胴縁釉。	黒色の微粒子 (胎土)灰色 (釉)暗オリーブ色	80%

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
第37図Q67	石棒	(7.7)	2.4	(1.7)	(51.5)	安山岩	先端部欠損。断面楕円形か	PL8
Q68	磨製石斧	(5.5)	5.1	(1.9)	(88.6)	安山岩	基部欠損。定角式磨製石斧	PL8

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
第38図Q76	敲石	(6.1)	3.3	(2.5)	(56.5)	凝灰岩	破片。2面使用	PL8
Q77	敲石	(5.0)	2.9	2.2	(55.8)	凝灰岩	破片。3面使用	PL8
Q78	敲石	4.3	3.1	3.1	(49.3)	凝灰岩	破片。3面使用	

図版番号	器種	計測値 刃長(cm)	刃幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
第38図M7	刀子	(6.3)	(1.7)	(1.0)	(0.9)	(0.3)	(6.9)	鉄	刃部先端欠損。両区両刃か	PL8
M10	刀子	(1.2)	(2.0)	(1.8)	(1.1)	(0.6)	(5.9)	鉄	刃部先端欠損。両区	PL8

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
M 8	不明鉄製品	(9.2)	1.5	1.5	(37.4)	鉄	上部は断面方形，下部は断面円形	
M 9	釘	(5.7)	0.9	0.4	(4.4)	鉄	断面方形，頭部は折り曲げられている	
M11	不明銅製品	1.9	1.4	0.1	(2.4)	銅	一方が閉じられている	

図版番号	器種	計測値				初鋳年代(西暦)	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
第38図M12	文久永寶	2.7	0.1	0.6×0.6	4.5	江戸(1863年)	PL8

表6　殿開遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(古→新)
							壁溝	主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴			
1	B 2 c2	N-11°-E	[長方形]	3.35 × 3.85	15~17	平坦	一部	2	−	−	竈1	−	自然	土師器片250，鉄滓7，陶器片1	平安時代	本跡→SI4
2	B 1 d0	N-85°-E	[長方形]	3.55 × 4.38	5~7	平坦	−	4	3	5	竈1	−	自然	土師器片65，鉄滓2	平安時代	本跡→SI4・SK11
3	B 2 f1	N-19°-W	[方形]	2.20 × [2.10]	4~5	平坦	−	4	1	5	竈1	−	不明	土師器片27，鉄滓1	平安時代	
4	B 2 d2	N-79°-E	[長方形]	4.30 × 3.70	45	平坦	−	−	−	1	竈1	1	不明	土師器片45，鉄滓2	平安時代	SI1・2→本跡→SK22

表7　殿開遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 遺構番号・新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	B 1 e6	N-31°-E	楕円形	1.45 × 1.24	53	緩斜	平坦	自然		
2	B 1 e6		円形	1.25 × 1.25	64	緩斜	平坦	自然		
4	B 1 d5	N-48°-W	楕円形	1.20 × 0.56	25	外傾	平坦	自然	土師器片9	
5	B 1 c9	N-24°-E	楕円形	1.40 × 0.92	40	外傾	平坦	人為		
6	A 2 j2		円形	0.67 × 0.64	21	緩斜	平坦	人為		
7	B 2 a2	N-55°-W	楕円形	0.95 × 0.79	40	緩斜	平坦	人為		
10	C 2 d1	N-15°-W	楕円形	1.65 × 1.29	46	緩斜	平坦	人為・自然	土師質土器1	
11	B 2 c1	N-71°-E	楕円形	1.75 × 1.08	74	緩斜	平坦	不明		焼土，炭火物，SI 2→本跡
12	B 2 c1	N-68°-E	楕円形	0.90 × 0.79	56	緩斜	平坦	人為		
13	B 1 d7		円形	0.92 × 0.95	39	緩斜	平坦	自然	土師器片8	
14	B 2 b1		円形	1.07 × 1.01	50	外傾	平坦	自然	土師器片2，須恵器片1	
15	B 1 c0		円形	1.35 × 1.32	60	外傾	平坦	人為	土師器片164	
16	A 2 j1	N-59°-E	楕円形	1.86 × 1.35	145	垂直	平坦	自然		
19	B 2 i2	N-12°-E	不定形	2.40 × 0.74	89	外傾	平坦	自然		第1号炉穴
20	B 2 j4	N-85°-E	楕円形	0.74 × 0.58	39	緩斜	平坦	自然		SD 2→本跡
21	B 2 j4	N-65°-W	(楕円形)	(0.96) × 0.72	32	緩斜	平坦	自然		
22	B 2 d2	N-83°-E	長方形	1.60 × 0.78	74	緩斜	平坦	自然	土師器片2	SI 1→本跡
23	B 2 h1	N-84°-E	楕円形	0.98 × 0.58	74	緩斜	平坦	不明		
24	B 1 g5	N-65°-E	楕円形	0.70 × 0.54	28	緩斜	凹凸	不明		
25	B 1 i0		円形	1.43 × 1.30	36	外傾	平坦	不明		
26	C 1 a0		円形	1.40 × 1.30	28	外傾	平坦	不明		
27	C 2 a1	N-26°-W	楕円形	1.29 × 0.79	43	外傾	平坦	自然		第2号炉穴
28	C 2 a3		円形	1.42 × 1.04	32	外傾	平坦	不明		
29	B 1 a0	N-55°-E	楕円形	1.78 × 0.81	62	緩斜	平坦	自然		第3号炉穴
30	B 2 d5	N-30°-W	長方形	2.20 × (1.10)	10	緩斜	平坦	不明		本跡→SD 1
31	B 2 c4	N-35°-W	長方形	2.10 × (0.84)	16	緩斜	平坦	不明		本跡→SD 1

表8　殿開遺跡溝一覧表

遺構番号	位置	主軸方向	形状	規模				断面	底面	覆土	出土遺物	備考
				確認長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
1	A 2 i2～B 2 f6	N-28°-W	直線	(33.6)	0.75～1.50	0.17～0.40	26～34	┐└┘	平坦	人為	土師器片22，鉄滓1	SK30・31→本跡
2	B 2 f7～C 2 f3	N-20°-E	曲線	(46.0)	1.85～5.25	1.10～4.10	35～75	╲╱	平坦	自然	土師器片16，瓶類器片5，砥石1，鉄釘1	SD3・4→本跡→SF 1，SK20・21
3	B 1 h9～B 2 i5	N-98°-E	直線	(25.1)	1.10～1.90	0.30～0.60	10	╲╱	平坦	自然	土師器片6，刀子1，不明鉄製品1	本跡→SD 2
4	B 1 g8～E 2 h5	N-98°-E	直線	(27.3)	0.50～0.75	0.20～1.20	15	╲╱	平坦	自然	土師器片9，砥石1	本跡→SD 2

第4節　ま　と　め

今回の調査では，旧石器時代の石器集中地点3か所，縄文時代の炉穴3基，平安時代の住居跡4軒，土坑2基，時期が明らかでない竪穴状遺構2基，土坑21基，溝4条，道路跡1条が検出されている。これらの遺構から，この地において旧石器時代から平安時代まで，当時の人々が生活していたことがうかがえる。

ここでは，時代ごとに遺構・遺物の概要を述べ，まとめとしたい。

1　旧石器時代

当遺跡からは，石器集中地点が3か所確認されている。しかし剥片類の出土が多く，定型石器の出土が少ない。石器が出土した層位は，当遺跡の基本土層の2～4層で，姶良Tnテフラ（AT）が含まれる5層の上位にあたる。石器集中地点における石器等の組成は以下のとおりである。

表9　石器集中地点及び石器集中地点外出土石器等組成表

石器 ＼ 石材		頁岩	珪質頁岩	流紋岩	黒曜石
第1号石器集中地点	ナイフ型石器	1			
	サイドスクレイパー	1			
	剥片	17			
	小　計	19			
第2号石器集中地点	角錐状石器		1		
	剥片		5		
	小　計		6		
第3号石器集中地点	ナイフ型石器	1			
	剥片	29			2
	小　計	30			2
集中地点	ナイフ型石器	2			
	サイドスクレイパー			1	
	剥片	2			4
	小　計	4		1	4
	合　計	53	6	1	6

表9から，第1号及び第3号石器集中地点では，石核や台石等は出土していないが，石器の製作あるいはその後の補修によって生じると考えられる調整剥片が多数出土していることから，石器製作跡の可能性が考えられる。当遺跡周辺の旧石器の調査としては，南東3kmに位置する取手市の柏原遺跡がある。柏原遺跡では200点以上の旧石器が検出され，石器製作跡と推定される場所も5か所ある。石材は頁岩が中心で，当遺跡の石器と類似する点も多いが，柏原遺跡から出土した石器は細石刃が中心であり，当遺跡とは時期差があるものと思われる。

2　縄文時代

縄文時代の遺構では，炉穴3基が検出された。炉穴は，遺跡の南部の低地に面する斜面部から2基，北部の台地の平坦部から1基が検出されている。南部の斜面部に位置する第1号炉穴と第2号炉穴は4mほどしか離れていない。炉穴から遺物は出土していないが，付近から早期の土器片が採集されており，またこれまでの調査例からも早期の可能性が高いと思われる。当遺跡からは，縄文時代の住居跡は検出されていないが，当時か

らこの地で人々が生活していたことがうかがえる。

当遺跡周辺の早期の炉穴の調査例としては，北東3kmに位置する原遺跡がある。原遺跡からは，15基の炉穴が検出され，貝殻条痕文系を中心とする縄文土器の破片が出土している。規模を比較すると，当遺跡の炉穴が長径1.4～2.0m，深さ40～80cmに対して，原遺跡は長径0.8～1.3m，深さ8～20cmのものが中心で様相が異なっている。

3　平安時代

平安時代の遺構は，竪穴住居跡4軒，土坑2基が検出されている。住居跡は4軒とも当遺跡の北部の台地の平坦部に位置している。これは遺跡の南部が斜面部となっているためで，これらの住居跡も含めて集落が存在したとすれば，その中心はさらに北側になる可能性が高い。また，4軒のうち第1・2・4号住居跡は重複しており，土層の堆積状況や出土土器から第1・2号住居跡より第4号住居跡が新しいと思われる。竈は第1号住居跡が北壁に，第2・4号住居跡が東壁に構築されていた。

出土した土器は，すべて土師器で，坏，高台付坏，椀，甕，甑などである。須恵器は出土していない。これらの土器はいずれも9世紀末から10世紀のもので，住居が存在した時期もそれほど差はないようである。これらの住居跡以外には，住居跡は検出されておらず，9世紀末から10世紀に存在した集落の可能性が高い。

4　時期不明の竪穴状遺構

当遺跡の南部から2基の竪穴状遺構が検出されている。いずれも斜面部を平らに削って平場をつくり構築されている。規模は，第1号竪穴状遺構が一辺10m，第2号竪穴状遺構は一辺2mと差がある。また，これらの遺構から不規則ではあるが，柱穴の可能性があるピットも検出されている。第1号竪穴状遺構には，中央部に炉の跡と思われる場所が検出されている。

ただ，これらの遺構からは生活に伴う遺物は出土しておらず，ピットが検出されていることから，上屋の存在は想定できるが，その性格を限定するのは難しい。第1号竪穴状遺構の覆土から中世（14世紀代）の古銭が出土しているが，これだけで時期を限定するのは困難である。

参考文献

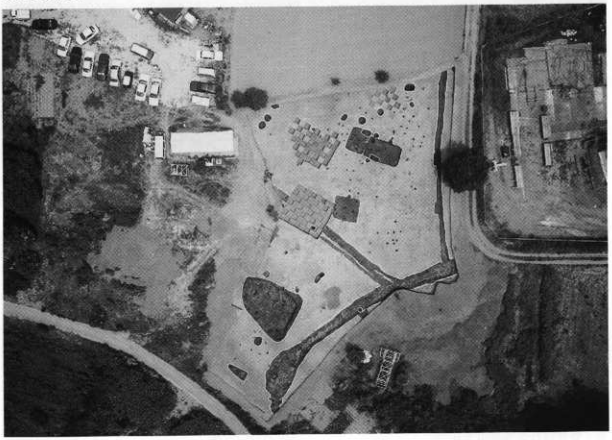
(1)　加藤晋平，鵜丸俊明『図録　石器入門事典－先土器』　柏書房　1991年3月

(2)　茨城県教育財団　奈良・平安時代研究班　「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」　『研究ノート』創刊号　1992年7月

(3)　茨城県教育財団「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　東原遺跡　前畑遺跡　柏原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第143集　1999年3月

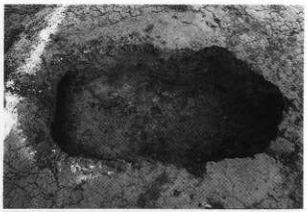
写 真 図 版

殿開遺跡遠景



殿開遺跡全景

第1号炉穴



第2号炉穴

第3号炉穴

第1・2・4号住居跡

第1号住居跡遺物出土状況

第1号住居跡竈

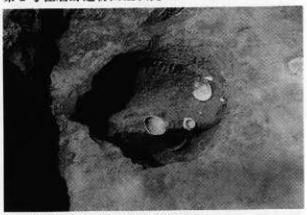
第1号住居跡竈遺物出土状況

第2号住居跡竈

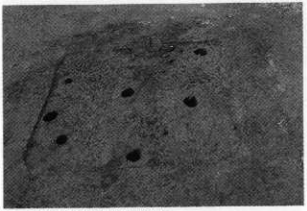
第 2 号住居跡竈遺物出土状況

第 2 号住居跡遺物出土状況

第 4 号住居跡遺物出土状況



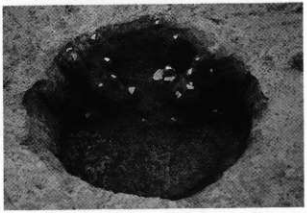
第 4 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第 3 号住居跡遺物出土状況

第 3 号住居跡竈遺物出土状況

第14号土坑



第15号土坑遺物出土状況

第１号竪穴状遺構（北から）

第１号竪穴状遺構（西から）

第１号竪穴状遺構遺物出土状況

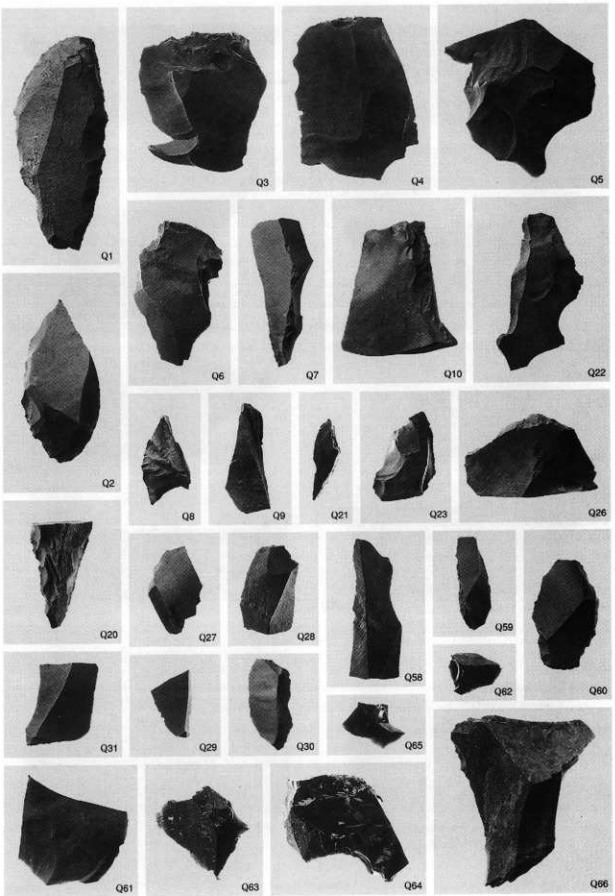
第２号竪穴状遺構

第１号溝

第３・４号溝遺物出土状況

第２号溝・第１号道路跡（北から）

第２号溝・第１号道路跡（南から）



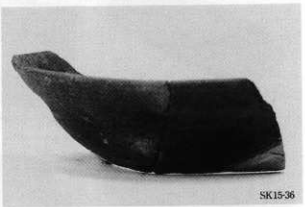
第1号石器集中地点・石器集中地点外出土遺物

第１・２・４号住居跡出土遺物

SK10-33

SK14-34

SK15-35


SK15-36

SK15-39

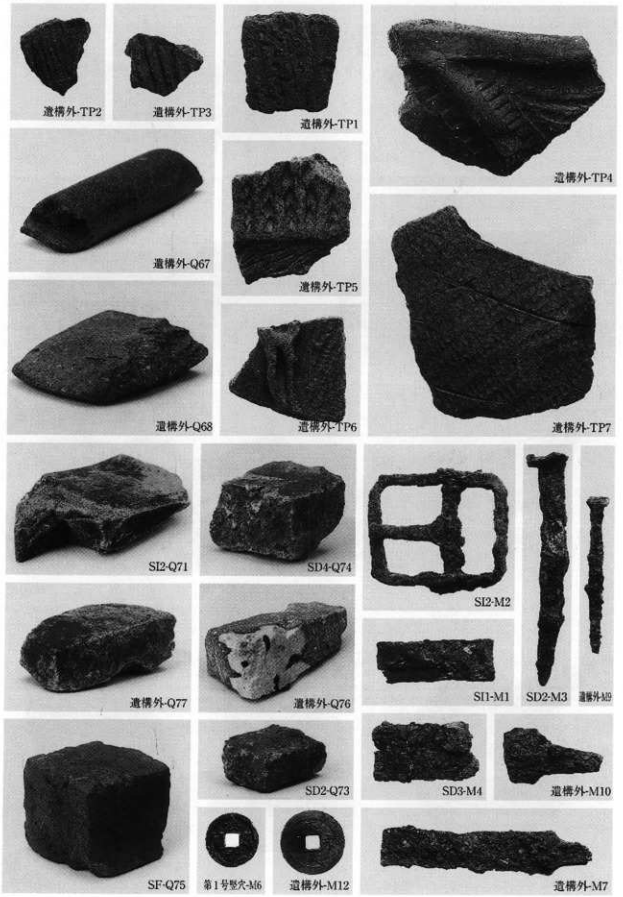
SK15-38

SI1-17

SI4-32

SK15-41

第１・４号住居跡，第10・14・15号土坑出土遺物



第1・2号住居跡，第2～4号溝，第1号道路跡，第1号竪穴状遺構，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第178集

常磐新線及び主要地方道野田牛久線
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

殿 開 遺 跡

平成13(2001)年3月15日　印刷
平成13(2001)年3月21日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029－225－6587

印刷　富士オフセット印刷株式会社
〒310-0067　水戸市根本3丁目1534－2
TEL 029－231－4241㈹